茨城大学人文社会科学部
地域史シンポジウム記録集

旅人たちが観た水戸藩

―旅日記・名所絵を読む―

IBARAKI UNIVERSITY

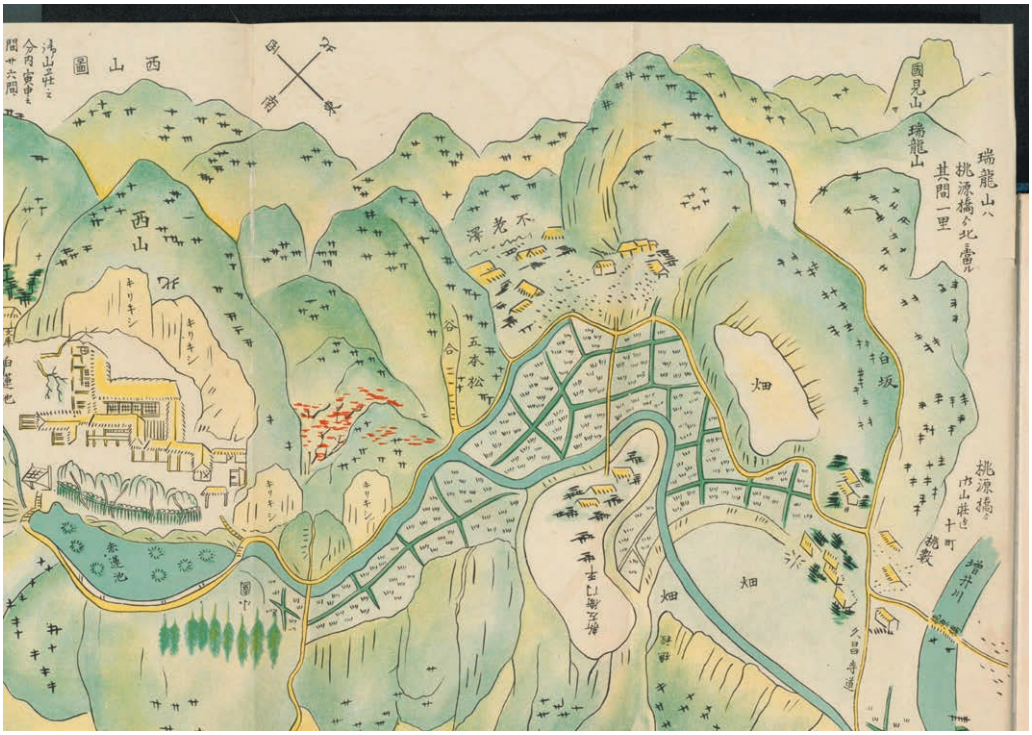
【口絵１】「常陸名所図屏風」（個人蔵、岩手県奥州市寄託）　右隻　124.5㎝×307.0㎝

【口絵２】「常陸名所図屏風」（個人蔵、岩手県奥州市寄託）　左隻　124.5㎝×307.0㎝

【口絵３】「常陸名所図屏風」部分　袋田の滝

【口絵４】舞水堂
（「水戸絵図」水戸市立博物館所蔵、水戸市立図書館デジタルアーカイブ）

【口絵５】御影堂（常陸大宮市 三村家蔵）



【口絵６】『桃源遺事』（＝『西山遺事』、徳川公爵家蔵版、茨城県国民精神文化講習所、1935年）より西山荘付近の図

二〇二二年三月六日（日）、第一六回茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウム「旅人たちが観た水戸藩―旅日記・名所絵を読む―」をオンライン（配信本部・人文講義棟一五番教室）で開催しました。本書は、その記録集です。

地域史シンポジウムは、人文社会科学部人間文化学科歴史・考古学メジャーの教員が、学界での議論や大学での調査研究の成果を市民の皆様に分かりやすく届けることを目的として、企画・準備・実施にあたっている地域連携事業の一つです。二〇〇五年度に始まり、二〇二一年度で一六回を数える息の長いイベントとなりました（二〇二〇年度は新型コロナウイルス感染拡大のために中止）。

今回のテーマは、江戸時代の「旅」です。

江戸時代のベストセラー『東海道中膝栗毛』をご存じでしょうか。主人公の弥次さんと喜多さんのコンビの珍道中の物語です。彼らが江戸から目指したのは、まず伊勢神宮でした。しかし、二人の旅は東海道を往復するだけでは終わりませんでした。彼らは、伊勢から京都、大坂へ行き、その後は瀬戸内海を渡って金毘羅へ。金比羅参詣をしたのちは安芸の宮島へ足をのばし、さらに木曾街道を歩いて信濃の善光寺へ、ここから草津温泉に向かっています。

ベストセラーとなったのは、当時誰しもが自分も旅に出たいと願ったからではないでしょうか。領主たちは、領民が長期の旅に出ることを嫌いました。しかし、領民はしたたかです。地道に旅費を貯えて神仏への参詣を果たした者がいれば、病気の治療を理由に旅に出る者もいました。どちらも表向きは殊勝なものに見えますが、実際には名所を見物したり、派手に散財したり、さらに遠くの観光地まで足を延ばしたりもしています。

こうして旅を体験してきた者の話は、生きた学問として人びとに伝えられました。華やかな都会の風景、歴史や物語の舞台となった名所・旧跡、その土地ならではの珍しい食事や土産の話に人びとは聞き入ったでしょう。

旅人からもたらされる情報は、外の世界へのあこがれを膨らませると同時に、自分が暮らす地域を見つめ直すきっかけにもなったに違いありません。

スイス生まれの日本学研究者であるヘルベルト・プルチョウは、その著書『江戸の旅日記』（集英社、二〇〇五年）のなかで、人間社会の近代化と旅が深い関係にあることを論じています。注目すべきは、江戸時代に旅日記を著した者には、宗教やイデオロギーに埋没するのではなく、「現実を追究するという姿勢」を持って旅に出て、そのなかで「批判的精神と個人主義と好奇心」を培っていった者も多いと説いていることです。少し難しい表現ですが、簡単に言ってしまえば、「百聞は一見に如かず」という考え方が、実証的な物事の捉え方を可能にし、自分の考えや立場を客観視することにもつながった、そして、それが近代の科学的な精神を養ったということです。突拍子もない考えのように聞こえるかもしれませんが、私は当たっているようにも思いますし、少なくとも旅という営為が人間社会にもたらした意義の広がりを感じさせてくれる重要な指摘だと確信しています。

さて、茨城の地にも多くの旅人が訪れました。旅人たちは何に惹かれて水戸藩を訪れ、どのような風景や風土にふれ、そして何を語ったのでしょうか。一方、旅人たちを受け入れた人びとは、彼らからどのような刺激や影響を受けたのでしょうか。本書では、いわゆる「よそ者」にまつわる記録を分析し、地元では気づくことが難しい、水戸藩の豊かな〈表情〉を読み解いてみたいと思います。

私たちは、いま「移動する」ことや「人と出会う」ことが難しい社会のなかで生きています。やはりオンラインでは伝わらないこと、バーチャルでは得られないものは多いでしょう。本書で語られるのは江戸時代の話ではありますが、人が「移動する」ことや「人と出会う」ことの意味に思いを致す、その一助になればと思います。

添田　仁

第一六回 茨城大学人文社会科学部 地域史シンポジウム 記録集

旅人たちが観た水戸藩 ― 旅日記・名所絵を読む ―

趣旨 …… 1

ポスター …… 4

報告者紹介 …… 5

水戸藩領内地図 …… 6

名所絵という営為 ―「常陸名所図屏風」の景観表現― …… 猪岡萌菜 7

小津久足の文事と徳川光圀 ―「右文」の時代の水戸藩― …… 添田仁 29

たどり合う戦国の記憶 ―佐竹西家の由緒調査と水戸領民― …… 高村恵美 45

他領民がみた水戸藩 ―常陸の風土と光圀の遺沢― …… 高橋陽一 61

旅人たちが観た水戸藩

旅日記・名所絵を読む

旅の大衆化が進んだと言われる江戸時代、茨城の地にも多くの旅人が訪れました。

旅人たちは何に惹かれて水戸藩を訪れ、どのような風景や風土にふれ、そして何を語ったのでしょうか。

一方、旅人たちを受け入れた人びとは、彼らからどのような影響を受けてきたのでしょうか。

いわゆる「よそ者」にまつわる記録から、地元では気づくことが難しい、水戸藩の豊かな〈表情〉を読み解いてみたいと思います。

猪岡 萌菜 成田山霊光館
名所絵という営為
「常陸名所図屏風」の景観表現

添田 仁 茨城大学
小津久足の文事と徳川光圀
「右文」の時代の水戸藩

高村 恵美 常陸大宮市文書館
たどり合う戦国の記憶
佐竹西家の由緒調査と水戸領民

高橋 陽一 宮城学院女子大学
他領民がみた水戸藩
常陸の風土と光圀の遺沢

（ファシリテーター）
佐藤 大介 東北大学

2022年
3月6日（日）
13時～17時

第16回 | 茨城大学人文社会科学部 地域史シンポジウム

お問い合わせ hitoshi.soeda.carp@vc.ibaraki.ac.jp（添田仁研究室）

Web会議サービスZoomを用いたオンラインシンポジウム
〈事前申込制／先着300名〉
※録音・録画等はご遠慮ください。

無料 受付期間：1/27～3/1
お申し込みは下記URLまたはこちらから ►
https://forms.office.com/r/2g7FUa1uK4

主催：茨城大学人文社会科学部／共催：東北大学災害科学国際研究所、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究B）「研究者ネットワークによる巨大災害被災地での歴史文化環境再生の研究」（代表：佐藤大介、課題番号：19H01293）、歴史文化資料保全ネットワーク東北大学拠点／後援：茨城県教育委員会、茨城新聞社、茨城大学五浦美術文化研究所、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク、國學院大學栃木短期大学日本史フィールド、常陽藝文センター、とちぎ歴史資料ネットワーク、常陸大宮市教育委員会、ふくしま歴史資料保存ネットワーク、宮城歴史資料保全ネットワーク／協力：奥州市牛の博物館

「常陸名所図屏風」（個人蔵）

報告者紹介

猪岡萌菜（いのおか・もえな）成田山霊光館学芸員

岩手県生まれ。専門は日本美術史で、特に中世末期から近世中期にかけての都市図屏風や名所図屏風を研究している。近年は成田山への信仰を取り巻く霊験譚や歌舞伎、浮世絵といった諸文化に関心を広げている。

「「常陸名所図屏風」の那珂湊と大洗」（地方史研究協議会編『海洋・内海・河川の地域史―茨城の史的空間』、雄山閣、二〇二二年）

「延宝二年の徳川光圀の成田山参詣」（『法談』六七、二〇二〇年）

「「常陸名所図屏風」の表現意識―近世名所図屏風の系譜に照らして―」（『美術史』一八三、二〇一七年）

添田　仁（そえだ・ひとし）茨城大学人文社会科学部准教授

広島県生まれ。専門は近世日本の都市史・海域史。「鎖国」下の密貿易や漂流など民際交流の実態を研究してきた。近年は水戸藩研究の魅力にもはまりつつある。また、被災した歴史資料・文化財の保存活動にもボランティアで参加している。

「水戸藩の流行り病―文久二年（一八六二）の麻疹とコレラを中心に―」（『常陸大宮市史研究』四、二〇二一年）

「茨城県下の地域資料の保存をめぐる現状と課題」（『地方史研究』四七〇、二〇二〇年）

「水戸藩の経師」（『常陸大宮市史研究』二、二〇一九年）

高村恵美（たかむら・めぐみ）常陸大宮市文書館主査（当時）

茨城県生まれ。専門は日本近世史。特に水戸藩領農村を研究対象としている。南郷道をはじめとする水戸藩領内の街道や河川交通など、流通についても関心を持っている。

「近世中後期における久慈川水運と地域社会」（地方史研究協議会編『海洋・内海・河川の地域史―茨城の史的空間』、雄山閣、二〇二二年）

「令和元年東日本台風における茨城県内での資料保全活動」（『日本歴史学協会年報』三六、二〇二一年）

「八里村役場文書の来歴と構造」（『常陸大宮市文書館報』四、二〇一八年）

「近世瓜連宿の展開」（『常総中世史研究』四、二〇一六年）

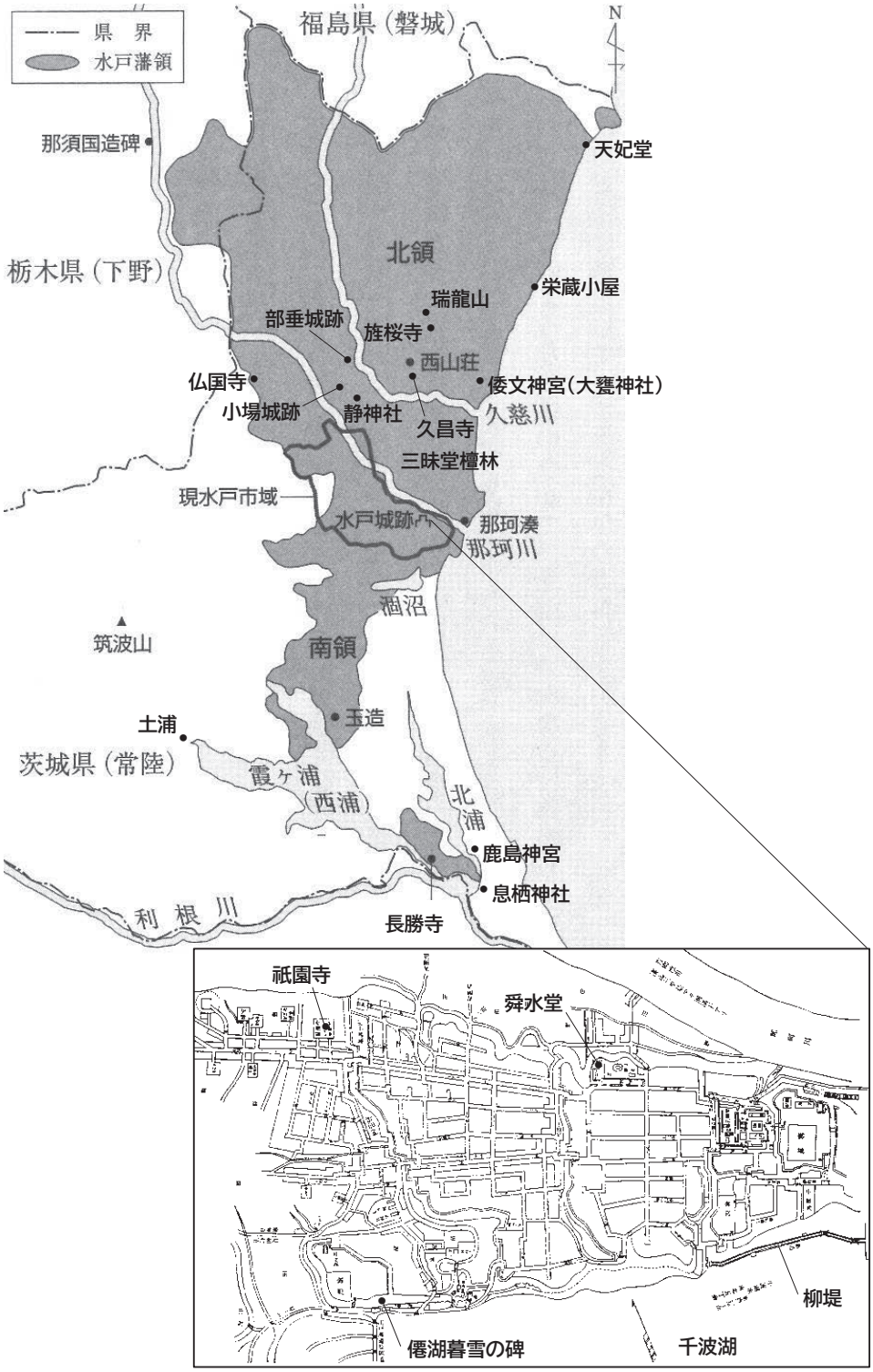
高橋陽一（たかはし・よういち）宮城学院女子大学学芸学部准教授

徳島県生まれ、奈良県育ち。専門は日本近世の旅行史、仙台藩の地域社会史。伊勢参りや東北地方の旅の記録を収集し、分析してきた。また、旅先側の動向にも関心を持ち、近世の温泉史料を調査し、地域住民による温泉の資源的活用について研究している。

「他領民の藩認識―水戸藩領への旅行者を事例に―」（『宮城学院女子大学研究論文集』一三二、二〇二一年）

『古文書がつなぐ人と地域―これからの歴史資料保全活動―』（共編著、東北大学出版会、二〇一九年）

『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』（清文堂出版、二〇一六年）



【地図】水戸藩領及び周辺地域の地名と名所

［典拠］鈴木暎一『徳川光圀』（山川出版社、2010年）所載の「水戸藩領略図」及び水戸市史編さん委員会編『水戸市史 中巻（一）』（水戸市、1968年）所載の「安政中水戸上町図」を加工して作製。

名所絵という営為 ―「常陸名所図屏風」の景観表現―

猪岡萌菜

「常陸名所図屏風」（個人蔵）の随所に先行図様の参照や引用が認められる点に着目し、図様の意味やそこに含み込まれる地域認識を探った。松島図を参照したとみられる景勝地としての栄蔵小屋、都市風俗図諸作品の町屋の図様に基づく静の景観など、本屏風では、それぞれの場の特徴や性質、伝承、生業等が、適切な粉本に依拠し視覚化されている。そしてそこに、注文主の常陸国に対する理想や地域認識を想定しうることを示した。

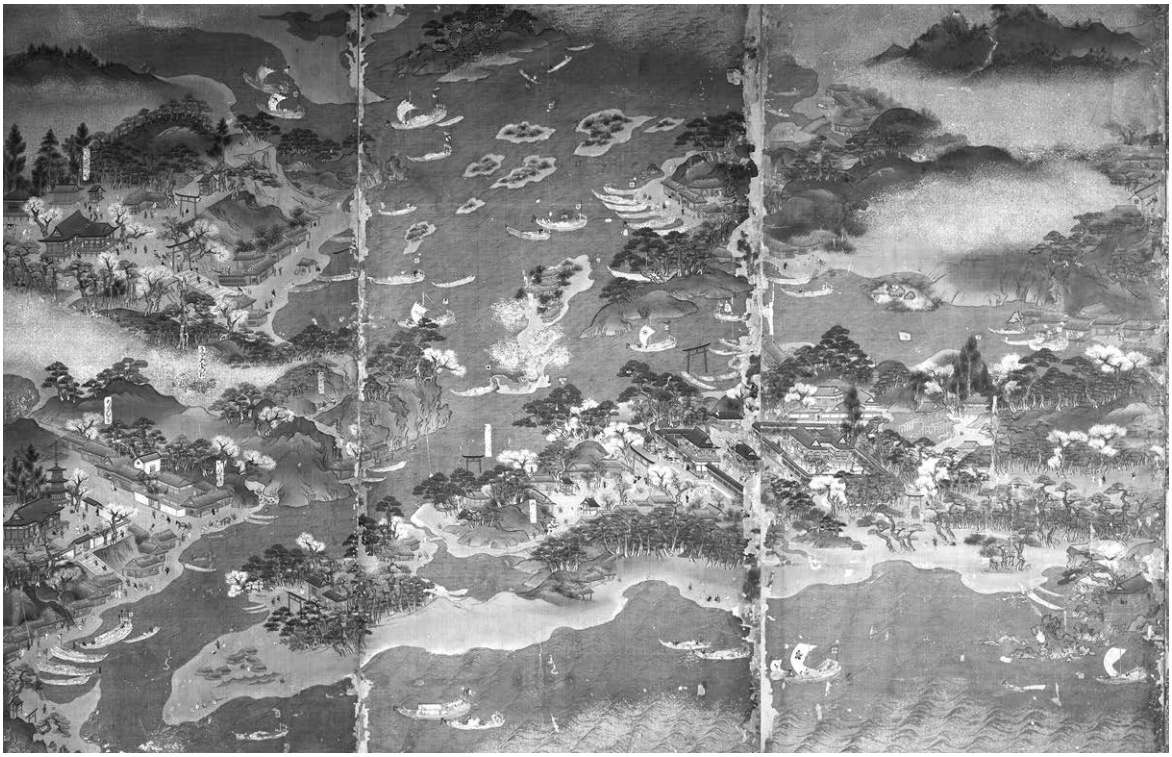
はじめに

私の報告は、「常陸名所図屏風」（個人蔵、岩手県奥州市寄託。以下「本屏風」とする）を取り上げまして、「名所絵の営為」という内容でやらせていただきます。後ほど詳しく説明しますが、今回のシンポジウムのテーマは「旅人たちが観た水戸藩」ですが、私の報告で扱う屏風は、むしろ常陸国の内側からの目線で描かれたものになりますので、そういう位置付けでお話しさせてもらえればと思います。

では早速ですが、まず本屏風の作品概要から確認したいと思います。【図1】【図2】が屏風の全図です。

「常陸名所図屏風」は個人の所蔵で、現在、岩手県の奥州市水沢というところにあります。六曲一双、絹本着色で、やや小さめの中屏風と呼ばれるサイズの作品です。絵師の署名落款はなく、現状、類似の様式の作品が見いだせていないため、ひとまず暫定的に町絵師の作だろうかと考えています。

【図１】「常陸名所図屏風」（個人蔵、岩手県奥州市寄託）　右隻　124.5㎝×307.0㎝



【図２】「常陸名所図屏風」（個人蔵、岩手県奥州市寄託）　左隻　124.5㎝×307.0㎝

右隻第一扇、右下の部分が大津の辺りで、左隻の第六扇が銚子と香取になっていまして、常陸国と、下総国の一部を太平洋側からの視点で捉えていて、景観年代がおおよそ一七世紀の末期頃、制作もほぼ同時期であろうと考えられます。もともとは奥州市の水沢で明治以降に漁網業で財を成した菊地家の所蔵で、明治の中頃には既に菊地家に伝来していたことが最近明らかになりました[1]が、それ以前の来歴は分かっていません。

配布資料に注を入れておりますが、日立地方の漁業家三代芳松の回想録の記述を根拠に、屏風の伝来について、水戸徳川家と仙台伊達家の婚姻関係と関連付けた考察がなされています[2]。しかし芳松の記録は、屏風の制作、伝来に関する点においては、後世の伝承的な性格を持っていて、史料に水戸様から仙台へ養子に来たときに持ってきたものだとあるものを、水戸徳川家と仙台伊達家の婚姻と解釈する点には飛躍があります。両家に婚姻関係が生じること自体も幕末期で、絵の時代とも合いませんし、さらに近世を通じて養子関係もないことから、現時点でこの史料の記述は、あくまでも明治期の伝承であるという参照にとどめて、まずは絵の画面に即した議論をすべきであるという立場をとっています。

話を戻します。本屏風は東廻海運の内川廻しの航路に関わる要素をつぶさに描いていることから、水運、海運に対する高い関心の下、水運に関わる豪商の周辺で制作された可能性を現在考えております。このように本屏風は、常陸国内側からの目線で描かれた作品であろうと考えております[3]。

本報告では、「常陸名所図屏風」の随所に先行図様の参照や引用が認められることに着目して、名所絵の景観表現、画中景観がどのように作られているのかを検討し、そこに含み込まれる図様の意味や地域認識を探っていきたいと思います。

分析に際しては、異なる視点から記録された同時代の文献史料も取り上げて、それぞれの史料で名所がどのように記されているのかにも目を向けます。

取り上げる史料は、まずひとつ目が『改正常陸国図雑記』。これは、常陸国の元禄国絵図を作ったときの諸記録で、水戸藩の絵図役人の調査記録や、寺社の朱印高や街道に関する記録等を含んでおりまして、原本は現存せず、明治一〇年（一八七七）の写本になります。国絵図関係の史料ということで、統治者目線の記録と言えるかと思います。

以下のふたつの史料は、外からやってきた訪問者の目線の記録で、まず『ひたち帯』。これは筆者の安藤朴翁が元禄一〇年（一六九七）に国元の丹波から水戸を訪ねて、水戸藩領内を中心とした常陸国周辺を旅した際の紀行文になります。

最後に『日乗上人日記』は、二代藩主の徳川光圀に招聘されて京都の深草からやってきた久昌寺の住持、日乗による元禄四年から一六年までの日記になります。

一　名所絵の虚実

では、内容に入ります。名所絵の虚実ということで、まず絵画史料を読むときにどういう見方をしているのかという話でして、大前提として、描かれている景観は、現実の地域の姿をありのままに写し取った写実ではないということがあります。

画中景観は、注文主の意図を反映し、絵師の手を経て画面に表される都市や地域の姿であって、これについては上杉本「洛中洛外図屏風」（米沢市上杉博物館蔵）の画中景観を写実とみるか、そうではないか、という議論に関して分厚い研究蓄積があり、これが非常に参考になります。むしろ、ここで確認された画中景観の見方や方法論を踏まえないと、都市図や名所絵は分析できないと言っても過言ではないかと思いますので、ご興味のある方は、参考文献に挙げているもの[4]をぜひご覧になっていただきたいと思います。

つまり、作品を描くときに意識的、あるいは無意識的な情報の取捨選択が必ず行われていて、描画対象の誇張や、既にないものをまだそこにあるかのように描く復元表現ですとか、改変、省略、それから実際はあったはずのものをなかったかのように描かないという不可視化、といった画面操作や演出は当然のように行われるものでした。都市図屏風や名所図屏風を見ると、そのような事例はたくさんあります。このような性質を指して、画中景観とは、「都市の心象風景[5]」であるとか、「周到に再構築された仮想現実[6]」であるといったことが指摘されています。

ただ、こうした絵画を全て絵空事として片づけるのではなく、一歩踏み込んで、画面操作や演出はなぜ行われるのか、そこにどういった意図が込められているのかという視点で作品を見ていきましょうというのが、今回の報告になります。

では、「常陸名所図屏風」でどういった画面操作や演出が行われているのかを確認していきます。

まず、左隻第三扇から四扇の鹿島神宮です【図3】。実際の鹿島神宮の諸殿は、楼門は西向きに建っていて、本殿と拝殿は北向きなので、逆L字型にかくっと折れ曲がる配置になっています。ところが屏風ですと、全ての建物が一直線上に並んでいて、しかも南を向いています。これはどういうことかというと、恐らく諸殿が重なり合わないように描くための絵画的視覚を優先した画面操作だろうと考えられます。

それから要石が描かれていますが、実際の要石は、地上に見えている部分がわずかであるのは割と有名ですが、屏風では人よりも大きく描かれていて、サイズが大幅に誇張されています。ですが、【図4】は幕末の安政の大地震の後に出版された鯰絵の一種で、人々が要石を拝んでいるというイメージです。これを見ると、要石が巨大に描かれているので、もしかすると信仰対象としての要石を概念的に描くと、このようにサイズが大きくなるのかもしれません。単なる誇張ではなく、信仰対象としての誇張という可能性を含めた要石の描写については、今後の検討課題です。

【図３】「常陸名所図屏風」部分　鹿島神宮

【図４】「あんしん要石」（国立国会図書館蔵）

【図５】「常陸名所図屏風」部分　旌桜寺

続いて、右隻第四扇の旌桜寺です【図５】。ここは源義家にゆかりの桜がある場所で、現在は廃寺になっています。別の場所に描かれた桜の花がただの点で表されているのに対して、旌桜寺の桜は、木自体も大木として表されていますし、花びらも一枚一枚、きちんと桜の花びらの形に描き分けられています。さらに、大木の周りに花見をする人々を描いていて、ここが桜の名所として、桜を際立たせて誇張させた表現が取られていることが分かります。

続いて袋田の滝の周辺です【図６】。ポスターにも使っていただいていますけれども、袋田の滝は、特に滝の右手にある天狗岩に着目したいのですが、細かい線が丹念に引き重ねられています。山や岩の質感や立体感を表す方法を皴法と言いますが、細かい線を丹念に丹念に重ねていく皴法で、これがほかの場所に比べてやはり非常に丁寧で、この部分は自然景を描くことに力を入れていると分かります。

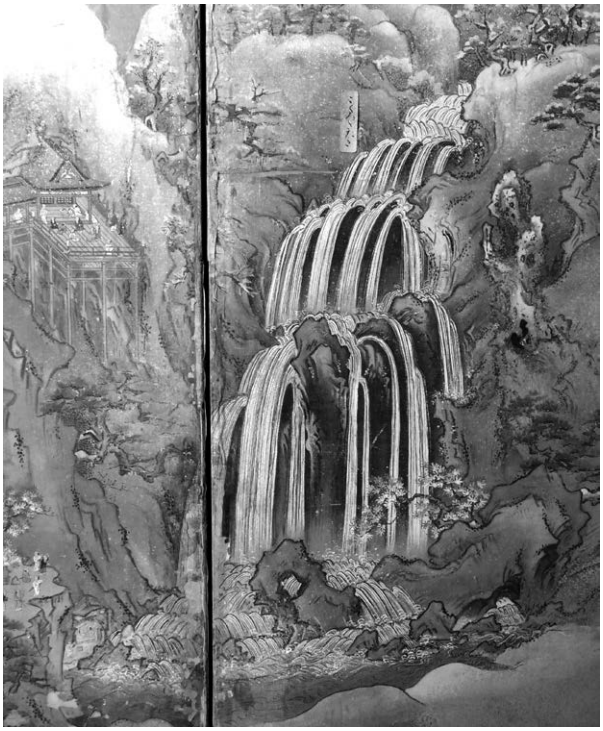
また、滝の周辺には成人男性しか描かれていません。老人や子供、女性の姿が一切ないのですが、この点は【史料１】、水戸藩の地誌『水府志料』の中に、袋田の滝について、「此所甚嶮岨にして、婦女老幼は至りがたし」とあることとよく合致しています。

【史料１】小宮山楓軒著『水府志料』[7]（文化一一年（一八一四））

四度滝といふ。四段に落、高四十二丈、幅四十間。国中無双の滝なり。（中略）此所甚嶮岨にして、婦女老幼は至りがたし。

つまり、名所の売りや見どころを絵として強調して、また、険しい場所であるから老人や女性、子供が行くのは大変だという実態をきちんと押さえた上で人物を描いていることがうかがえます。

続いて、右隻第五扇から六扇の村松虚空蔵堂です【図7】。村松虚空蔵堂のすぐ近くに、本来は龍蔵院と龍光院という別当寺があったそうですが、これらが屏風の中には描かれていません。た



【図６】「常陸名所図屏風」部分　袋田の滝

【図７】「常陸名所図屏風」部分　村松虚空蔵堂

だし門前には、頭襟を着けた三人の修験者、山伏の姿があります。屏風の中で修験者が描かれているのは、この村松と、鹿島神宮の門前のみで、山伏はあえてここに登場している特別な登場人物だと言えます。別当の龍蔵院は、虚空蔵堂周辺の修験者を統括する立場だったそうで[8]、画中の三人の修験者は、この場所が修験者と関わりの深い場所であることを踏まえた登場人物だと言えます。

それから、左隻第一扇下部の那珂川の河口です。河口が画面向かって右側に湾曲していますが、昔はこのように湾曲していたことが絵図からも分かっています。また、現在の那珂川河口の様子と比較すると、屏風の中で大洗側を高台状に表す点などは、地形表現においてかなり実景を意識していると言えます。ただし、大洗の祝町にあったはずの水戸藩公認遊郭が描かれておらず、いわゆる悪所が不可視化されていることが指摘できます。悪所を描かない作品は近世の都市図屏風の中に他にもあって[9]、本屏風も意図的に特定の悪所を不可視化しているものだと考えられます。

続いて、右隻の第二扇から第四扇にかけて、今の日立市に該当する部分は、複数の地点を凝縮あるいは合体させたとしか説明できないような、不思議な表現が取られています。例えば諏訪の水穴と大久保の風穴は実際はかなり離れていますが、屏風ですと、あたかも同じ場所にあるかのように描いています。もうひとつ、風土記にも出てくる水木の泉神社の近くにある泉が森湧水。そこから流れてくる川は泉川のはずですが、屏風ですと、すぐ左隣が村松になっていて、では久慈川はどこにあるんだろうかという話になってしまいます。なのでこれはひょっとすると、泉川と久慈川、あともうひとつ、茂宮川も一緒になっているのではないかという説もありますが[10]、複数の河川をあたかもひとつの川であるかのように描くという不思議な描き方がなされています。なので、その川に架かる橋も具体的にどの橋なのかがよく分かりませんし、川の両側の集落も、具体的にどこなのかがはっきりしません。とにかく色々な名所を描けるだけたくさん描きたかったんだろうかというような描き方で、実際の景観を大胆に改変して空間を省略しているのだと考えられます。

以上のように、名所絵の虚実の「実」の部分は名所の実態に関する情報。これは、屏風の制作に当たって、事前にどうやら情報収集や取材をある程度やっていた可能性が考えられます。これに加えて「虚」の部分は、先ほど見てきたような絵画的な演出が加えられている部分です。この「実」と「虚」を違和感なく再構成したものが「常陸名所図屏風」の画中景観だと言えます。

二　先行図様の参照・引用

もうひとつ、名所絵の虚実とも関連する点として、本屏風は常陸国の広域を描いた屏風絵としては初発性が高いのですが、個別の図様に着目すると、時代や絵師の流派を超えて描き継がれてきた図様が随所に参照されていることが分かります。このような定型表現を「風俗画の慣用句[11]」と呼んだりします。例えば琵琶法師

と子供と犬のセットの図様や、主人を待って退屈しているので、腕を掻いたり居眠りをしたりする従者の姿。他にも猿曳や歩き巫女や歌比丘尼のような芸能者たちは、こういった都市図や名所絵に必ずといっていいほど見つけられる登場人物たちです。

生業描写に関しても、例えば村松には塩焼きの様子が描かれていますが、村松は実際に塩焼きが行われていた場所です。ですがその描写も、文正草子のような塩焼きの場面を描く絵画を参照していることが分かります。また、「石山寺縁起絵巻」（石山寺蔵）などに描かれている洗濯をしている女性の図様がありますが、その図様を、屏風では染色の行程の一部として引用していることも指摘できます。

そもそも前近代の絵画は、描く対象を目の前にして見たままを写生するのではなく、美術史でよく「絵から絵を作る」という言い方をしますが、基本的には、粉本や絵手本を写すことで新しい絵を作っていくものでした。風景画などは、現地取材をある程度やったと考えられる場合もありますが、それは本画制作のための参考資料にする下絵としての性格を持つものでした。

絵師とはアーティストというよりは職人であって、注文主の要望を聞き、それに応える粉本を選び出して、注文主の要望を取り入れながら新しい作品を作っていきます。先行図様を利用することの意味と効果としましては、絵師の作画上の便宜であったり、注文主からのリクエスト、元の図様が持っていた意味内容を取り込んで暗喩させるといったことのほか、風俗表現の場合は、画面の空間の中に迫真性や臨場感を演出し、鑑賞者の共感を生む効果がもたらされると言われています。[12]

この手の名所風俗図屏風が非常に豊かな景観内容を持つことについては、複数の人で語りながら見るものであった[13]ことがポイントで、例えば退屈している従者などは、今私たちが見ても共感できるものだと思いますが、そういった図様を見つけ出すことによって、会話を生むきっかけになったり、話のネタとして機能したりする一面があります。

三　画中景観はいかに作られるのか
―景観表現における先行図様参照―

以上を踏まえて、続いて、屏風絵の画中景観はどのように作られるのか、景観表現にも先行図様が用いられていることに着目して見ていきたいと思います。

まず、右隻第二扇から三扇にかけて描かれている栄蔵小屋という名前の島についてです【図8】。栄蔵小屋は海の上に切り立った小島で、橋が架かっています。島には多くの松が生い茂っていて、真ん中には小さな祠があって、その右手には詳細は明らかではありませんが、家屋あるいは庵のようなものがあります。

細部を見ると、島の上では酒宴が催されていますが、中央で扇を持って舞を舞う人物という図様は、よく描かれる酒宴の定型表現です。また、断崖の上から海を見下ろす人物が一人います。島

【図８】「常陸名所図屏風」部分　栄蔵小屋

の下のほうを見ますと、海蝕洞になった部分を遊覧する小舟が描かれていますし、その近くの漁船には、作業の手を止めて島の方を振り仰いで見ている人の姿があります。つまりこういったことから、画中の栄蔵小屋は、景勝地かつ行楽地として描かれていることが分かります。

では、史料上で栄蔵小屋はどう書かれているのかといいますと、以下の通りです。

【史料２】『改正常陸国図雑記』写本[14]（東京大学史料編纂所蔵）

田尻村へ着シエイソウコヤ見聞、此所ニ明神ノ社有リ、海面巳ノ方向（南南東）ナリ、右ノエイソウコヤ地形亥ノ方向（北北西）ナリ、長拾三間程、横八間程、殊ノ外ケイ地ナリ、

【史料３】安藤朴翁『ひたち帯』[15]

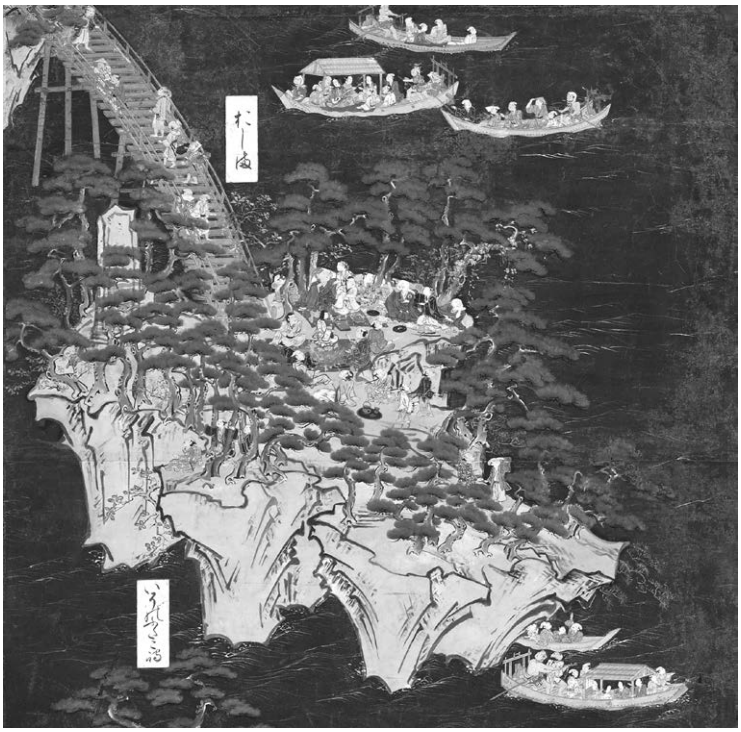
栄蔵小屋といふ嶋山を見る。この嶋むかしは田尻の山につゝきたりしか、あらき浪風にいつとなくくつれたへて、をのから嶋となれりとそ。西山殿（徳川光圀）の好事にて、こなたの峯より橋をかけてわたりかよふに、橋の下四五丈もやあるらん、蒼波たゝへていとすさましく、もゝふるひあなうちし（ママ）ゝまるこゝちそする。嶋はみな岩ほにして、まわり六町もやあるへき、数百本の松塩風におひさらほひつゝ、いと見ところおほし。荒海の高しほ山のくつるることくにおそひかゝりて、魂もけぬへきやうにおほゆ。いつの比にか有けん、栄蔵といふ法師この

嶋に小屋をたて、おこなひたるより、すなはち栄蔵小屋の名を得たりとそ。

これらによれば、まず、光圀が架けた橋があったことが分かります。高さは大体一二mから一五mほどの位置にあって、島の外周は、『ひたち帯』の数字を素直に換算すると約六五四mになりますが、『ひたち帯』の数字については、随分誇張がありそうです。島の面積は、二五mプールよりひと回り小さいぐらいのサイズで、明神の社があって、多くの松が生い茂っていたとあります。また、【史料3】に「荒海の高しほ山のくつるることくにおそひかかりて」と、島を崩すように波が打ち付ける様子が記されています。【史料2】は国絵図制作に際しての調査記録なので、基本的には寺院のお堂の大きさや向きを淡々と書く傾向があるのですが、栄蔵小屋については、傍線部に「殊ノ外ケイ地ナリ」という文言がありますし、【史料3】傍線部で朴翁も「いと見ところおほし」と記していて、当時も景勝地として認識されていたことがうかがえます。

改めて絵に戻りますと、松が生い茂っていて、人々が遊楽している景勝地として描かれていますし、祠もあるし、波も打ち付けている。一見、実情をよく捉えたものであるかのように見えます。ところが、図様だけで見ると、この部分は松島を描いた作品を参照している可能性が高いです。

【図9】は、「常陸名所図屏風」とほぼ同時期の制作と考えられ



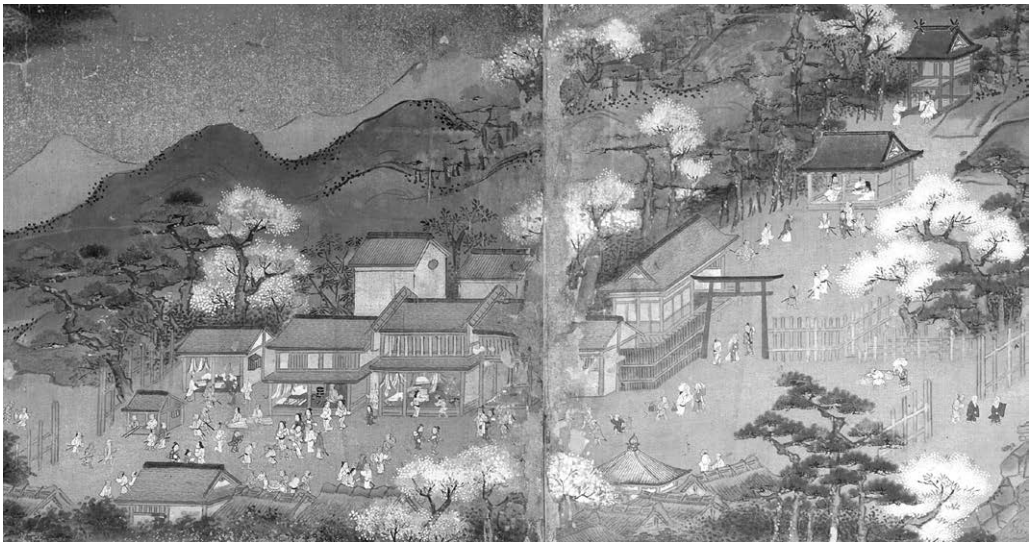
【図9】「塩竈松島図屏風」（福岡市美術館蔵）部分　雄島

ている「塩竈松島図屏風」（福岡市美術館蔵）です。あくまでも、この絵を直接参照したというわけではなく、分かりやすい事例として提示していますが、こういった松島を描いた作品の、特に五大堂や雄島との近似性や共通性が認められます。橋が架かった景勝地の小島という要素だけでなく、細部を見ますと、酒宴が開かれていたり、遊覧する小舟が描かれています。絶壁の上から海を見下ろすポーズの人の姿もあります。こういった点がよく共通しています。

先ほど見てきた通り、栄蔵小屋と松島は、橋、海の上の小島、松という景観構成要素の共通性を持っています。この福岡市美術館本だけでなく、他の松島図屏風でも島の周りを遊覧する小舟や酒宴、それから切り立った断崖の上から海を見下ろす人の図様はしばしば描かれる傾向が顕著で、松島の定型表現のようになっていた可能性が考えられます。[16] ですから、海辺の小島の景勝地である栄蔵小屋を描くに当たり、景観構成要素が共通している既存の松島のイメージを参照した可能性が考えられます。

つまり画中の栄蔵小屋は、実際の栄蔵小屋に関する知識や情報に加えて、松島の既存図様を組み合わせることで画面構成を図っている。ひょっとすると、推測ですが、景勝地の松島をあえてオーバーラップさせる意図もあったかもしれません。

続いて右隻第五扇から六扇の静です。【図10】の画面右が静神社で、左側は静の門前の景観になります。



【図10】「常陸名所図屏風」部分　静

【史料4】『改正常陸国図雑記』

一明神御社向作、大社作トモ申候由、トチフキナリ、
一拝殿長五間半　ツマ三間アシカヤフキナリ、拝殿の右左ニ大杉二本有、何レモ六カヽイホト也、御カクラ所ハ御社之右ニ有、三間四面、御クウ所左ニ有、五間ツマ三間ナリ、
一唐門有、半唐門ト申候由、左右ニ大臣有、ヅイチントモ申由、唐門前ノ石段キハニサカキ二本有リ、左ノ方ニ大杉并大檜モ有、
一御鳥井ハ巳向（南南東）ナリ、石段ハ四十五段也、境四段ナリ、
一末社四社有ヲシテ、高フサ両社、玉造明神、山子明神、
（中略）
一御社内之山、北ノ方ヘ二百間ホト有之由、

【史料4】によれば、静神社の本殿は栩葺の向造、拝殿は葦茅葺で、左右には大きな杉が二本あり、ほかに神楽所、御供所、唐門があって、唐門の前には石段があったとあります。

ところが、絵の静神社は、どれが本殿かもよく分からず、史料の建築様式に合致する本殿や拝殿らしきものは描かれていません。杉や唐門、石段も描かれておらず、この景観描写は実情と恐らく大きく異なっていただろうと分かります。

それから門前の様子は、二階建ての町屋が軒を連ねていて、うだつを上げる町屋もあります。裏には白壁の土蔵があります。左端は、戸がありませんが木戸のようなものがあり、木戸番も描かれています。こちらも、ひょっとすると実際の静村の景観とは随分異なっていたのではないかと考えられます。

うだつを上げた町屋が軒を連ねる様子や、裏に白壁の土蔵が見えている景観は、洛中洛外図や江戸図のような都市風俗図にしばしば見られる景観描写で、何らかの先行作品の中の町屋や宿といった都市景観を参照した可能性が考えられます【図11】。

本屏風の静の町屋は、軒下に帯飾りのような布を下げていますが、こういったものも、例えば林原美術館本系の洛中洛外図の中に、同じように布飾りを下げる町屋の描写が見られます。ですから、このような町屋と、裏に蔵がある様子、それから木戸が、ある種の都市図の定型表現になっていた可能性が考えられます。

とはいえ静の場合は、町屋が全て布を売っていて、布屋がいくつも並んでいます。それから往来を歩く女性たちは、みんな布を抱えています。往来の人々の中には、「一遍聖絵」（清浄光寺蔵）に出てくるような、布を売り買いする人の図様を参照したであろう人物の姿も見られ、布に関わるイメージを執拗なくらい描き込んでいます。これも恐らく実際の江戸時代の静とは全く異なっていたはずで、静織（倭文）の郷の伝承に基づく景観描写であると考えられます。

静織の郷とは、この地で初めて倭文という織物が織られたことにちなんで名づけられたものです。都市図において、町屋を描く場面で同じ物を売る店が何軒も並ぶ例というのはほとんどありません。ところがここではあえて布屋ばかりを並べて、布を持つ人

【図11】「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館蔵）部分　品川宿

たちも沢山描いて、先行作品の中に登場する布を売り買いする人物の図様も引用して、この場所が布にゆかりの地であることを念入りに演出して視覚化していると分かります。つまり、絵としてはフィクションなのですが、静織の郷の伝承に基づく観念的な都市空間の表現であると言えます。

続いて、左隻第一扇上部の塩子観音、仏国寺です。

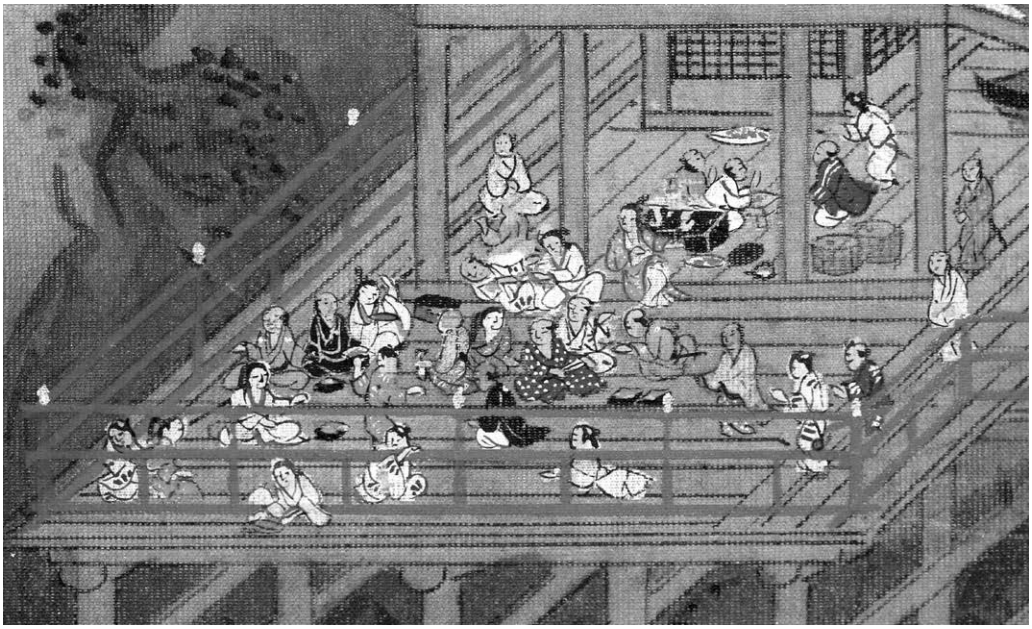
仏国寺には、かつて懸崖造の観音堂と、そこに向かう上り廊があり、絵では上り廊には一部壁がない部分があります。本当にこういうふうに壁がない部分があったのかどうかは疑問で、恐らく人々が廊下を歩いている様子を見せるために、意図的に中を見せようと壁を取り払っているのではないかと考えます。絵巻でいう吹抜屋台と呼ばれる、屋根を描かずに室内を見せる手法がありますが、そういった絵画的な画面操作なのではないかという意味です。

観音堂の上では、月が出ており、月見の宴が催されています【図12】。ですからここが夜であることが分かります。観音堂の下には、三昧洞穴と呼ばれる宗教的な場所が描かれています。

史料上で塩子観音がどのように記されているか、【史料5】から【史料7】にそれぞれ記述があります。

【史料5】『改正常陸国図雑記』

一塩子観音、十一面観音也、行義（ママ）ノ御作ナリ、
拝殿ノ額ニ岩谷山仏国寺再堅教等上人ト有リ



【図12】「常陸名所図屏風」部分　仏国寺

御堂ハ辰巳向（南東）、上リ段廊下作ナリ、万仏堂ニ教等上人之御エイ有、
（後略）

【史料6】『ひたち帯』
なを里々をすきて塩子といふ村につきて、岩屋の観音をおかむ。寺号は仏国寺真言宗ほさつ安座の岩屋へ、こなたより廊橋をかけてわたる。橋の下は深谷いくはく丈かあるらん、もろこし天台山の石橋もかうやあらまし、とおもひいてらくさまなり。

【史料7】『日乗上人日記』元禄一一年四月一九日条[17]
（前略）午時雨すこしやみける間に、観音堂ニ上りて一見ス。京にてもかゝる所ハ見ず。岩の高七丈も有べき両方にありて、中ほどより上の方に堂ヲ岩のほらに立たり。らうかにて上る也。水のながれ木だちにいたる迄物ふりたるけしき也（後略）

どの史料にも必ず、上り廊と岩屋の洞に建てられた観音堂について書かれています。

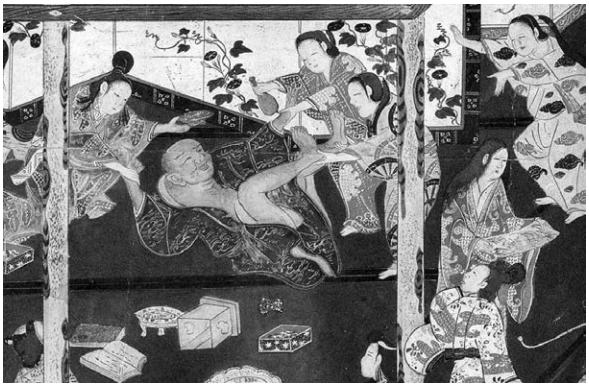
【史料6】で、朴翁は仏国寺の様子を「もろこし天台山の石橋もかうやあらまし」と、中国の天台宗の聖地になぞらえています。【史料7】では、京都からやってきた日乗が、「京にてもかゝる所ハ見ず」と言っています。また、「物ふりたるけしき也」とも言

っており、類まれな景色であって、古めかしい深山幽谷の観音霊場であった様子がうかがえます。

ただ、先ほども少しお話ししましたが、屏風の仏国寺観音堂では酒宴が開かれています。この部分には女の人たちがいて、本屏風の山間部の名所で唯一女の人が描かれている場面です。仏国寺が関東の女人高野と呼ばれたこととの関係も検討しなければいけませんが、とはいえこの女性たちは、髷を高く大きく結い上げた髪型から、遊女であると推測されます。

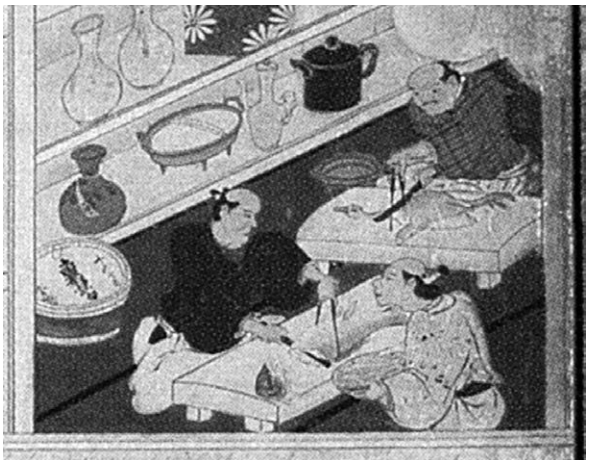
なぜこのお寺に遊女が、という話なのですが、これは恐らく酒宴の図様を転用したためと考えられます。例えば、扇を持って舞を舞う人物や、酔って体勢を崩す人。酒樽や、脚付きのまな板を置いて料理をしている様子、それから洲浜と呼ばれる飾りがあります。これらは近世初期の野外遊楽図ですとか、室内遊楽図における酒宴の図様と共通するモチーフです。

【図13】はかなり享楽的で極端な例ですが、酔って羽目を外して転がる人や、【図14】は野外で扇を持って舞を舞う人物、横に



【図13】「歌舞遊宴図屏風」
（サントリー美術館蔵）部分

【図14】「遊楽図屏風（相応寺屏風）」
（徳川美術館蔵）部分



【図15】「遊楽図屏風（相応寺屏風）」
（徳川美術館蔵）部分

は洲浜が置かれています。それから【図15】には調理をするときの脚付きのまな板、酒樽といったモチーフが見られます。仏国寺の月見の様子は、こういったイメージが念頭にあって描かれたのだと考えられ、霊地性よりもむしろ名所が遊楽を描く口実になっています。ただし【図13】のような絵に比べると、享楽性はかなり控えめで、どんちゃん騒ぎの様子や、もっと際どいセクシャルな身体接触を伴う絵も近世初期には盛んに描かれますが、そういった図様は、本屏風の中には見られません。

ところで、神社や仏閣が霊地性よりも遊楽を描くための場所になっていることと関連して、本屏風には僧侶の数が極端に少ないことが指摘できます。

本屏風では寺院はそれなりに描いていますが、僧侶が全然いません。画中人物は、私が数えた数だと全部で一六四七人いるのですが、そのうち僧侶はたったの六人、〇．四％ぐらいです。参考として、中世末期の京都の事例なので、どれくらい比較対照として妥当かという問題がありますが、現存最古の洛中洛外図である歴博甲本だと、画中人物一四二六人中、僧侶は一〇八人で、約七．六％。歴博乙本の場合は一一七二中二三人で約二％と全然多いわけです[18]。

このように僧侶が非常に少ない一方で、神職の姿はしかるべきところにそれなりの数描かれていて、一六四七人中一八人（約一．一％）登場します。これは注文主の好みを反映して意図的に僧侶を減らしているのか、それともちょうど屏風と大体同じくらいの時期に、光圀の宗教政策で寺院や神社をかなり整理していますので、そういったことと関係があるのかどうか、今後詳しく検討していかなければならないと考えています。

まとめに代えて

常陸国の全域と下総国の一部を描いた屏風絵としては初発性の高い本屏風ですが、個別の図様に着目すると、風俗表現や景観表現には、先行作品に繰り返し描かれてきた図様が随所に参照されています。それらの先行図様は、それぞれの名所の特徴や実態を踏まえて適切なものが選び取られていることがうかがえ、人物一人ひとりといった細部にまで、かなり細かく気が配られています。本屏風を制作した絵師は、常陸国の名所の実情をよく知る注文主の意図を適切に汲み取りながら、それぞれの名所を描くのにふさわしい粉本、先行図様を適切に用いて常陸の景観を屏風の中に構成しています。

つまり、埋め草的な人物はほとんど見られないということで、本屏風は大量生産品ではなく、特別な注文に応じて制作されたオーダーメイドの誂え物であることが、ここからも裏付けられます。

屏風の画面に描かれているのは、地域の姿をありのままに写し取った名所景観ではなく、恣意的な操作や改変が自在に加えられたもので、常陸国内部の生活者であろう注文主が見たいと欲した自らの生活空間としての地域の姿であり、注文主というかなり限

定的な存在が地域に対して抱いていたセルフイメージを、絵師の手を通して視覚化した結果が「常陸名所図屏風」であると結論付けられます。

個別の図様に意味があって、注文主の意向を反映するものだという視点で屏風を見たときに、例えば暴力的なイメージも違った意味を持つものに変質していることが指摘できます。【図16】はかぶき者の喧嘩なのですが、本屏風の中で唯一の暴力的なイメージで、もともとは、市街地で突発的に始まった、大ぶりの刀や槍で斬り合うかぶき者の喧嘩に、周囲にいた人たちが逃げ惑うという、荒々しく暴力的で混乱した図様でした。

ところが、本屏風の場合だと、逃げ惑う人の姿は一人見られるくらいで、ほとんど描かれません。代わりに馬に乗って駆け付けてくる武士の姿があります。恐らく役人のような立場の人物だと思いますが、この役人に対して喧嘩の現場を「あっちですよ」と示している人物もいます。管見の限りではありますが、このような、駆け付けてくる武士をセットで描く喧嘩のイメージは見たことがありません。なので、これは恐らく公権力によって暴力行為が統制されることを意味していて、役人に協力的な市井の人々の姿によって、統治が行き届いた治安の良さを表すイメージに変質しています。つまりこれは、混乱がない、あるいは混乱が起きたとしてもすぐに統制される、平和な地域という理想像が投影されているという読みもできるのではないかと思います。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

【図16】「常陸名所図屏風」部分　かぶき者の喧嘩

［註］

（1）川崎和明「久慈浜の偉人三代芳松の日記に「常陸名所図屏風」を見る」（日立市郷土博物館『市民と博物館』一一八、二〇一六年）。

（2）原口知武「「常陸名所図屏風」についての考察」（『茨城県立歴史館報』四四、二〇一七年）。

（3）以上の屏風に関する見解は、特に注を入れない限り、猪岡萌菜「「常陸名所図屏風」の表現意識―近世名所図屏風の系譜に照らして―」（『美術史』一八三、二〇一七年）に基づく。

（4）奥平俊六「ミヤコの残像―上杉家本「洛中洛外図」―」（同『新編名宝日本の美術二五 洛中洛外図と南蛮屏風』小学館、一九九一年）。および黒田日出男『謎解き洛中洛外図』（岩波書店、一九九六年）。

（5）小澤弘『都市図の系譜と江戸』（吉川弘文館、二〇〇二年）、六三頁。

（6）馬渕美帆『絵を用い、絵を創る―日本絵画における先行図様の利用―』（ブリュッケ、二〇一一年）、一二頁。

（7）茨城県史編さん会編『茨城県史料 近世地誌編』（茨城県史編さん会、一九六八年）。以下引用に際し、旧字は新字に改めている。

（8）村松山虚空蔵堂創建千二百年記念実行委員会編『村松虚空蔵堂創建千二百年記念　村松山虚空蔵堂縁起』（村松山虚空蔵堂、二〇〇七年）。

（9）例えば「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館蔵）に悪所が描かれないことは、諏訪春雄「江戸図屏風の世界」（諏訪春雄、内藤昌編『江戸図屏風』毎日新聞社、一九七二年）で早くから指摘されている。また「高松城下図屏風」（香川県立ミュージアム蔵）でも、松岡明子「美術史の視点から見た「高松城下図屏風」」（『調査研究報告』三、香川県立歴史博物館、二〇〇七年）により遊楽の場が意図的に描かれていないことが指摘されている。

（10）綿引逸雄「常陸名所図屏風シリーズ」八（「ひたちの大地に ふるさと散歩」六五、日立市郷土博物館、二〇一六年）。

（11）註（4）奥平前掲書。

（12）佐野みどり「絵巻にみる風俗表現の意味と機能」（秋山光和博士古稀記念論文集刊行会編『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』便利堂、一九九一年）、および註（6）馬渕前掲書。

（13）武田恒夫『日本の美術二〇　近世初期風俗画』（至文堂、一九六七年）。

（14）以下、同史料の翻刻に際しては、朱書で訂正が入る箇所は朱書の文字を採用し、傍注と傍線は報告者による。

（15）小川常人、永光尚「「ひたち帯」解題」（『丹波史談』一〇五、一九七九年）。

(16) 五大堂や雄島の周辺に同様のモチーフが見られる「塩竈松島図屏風」として、仙台市博物館本や個人蔵本がある。

(17) 稲垣国三郎編『日乗上人日記』（日乗上人日記刊行会、一九五四年）。

(18) 歴博甲本、歴博乙本の画中人物の数は、国立歴史民俗博物館「洛中洛外図屏風「歴博甲本・乙本」人物データベース」https://www.rekihaku.ac.jp/rakuchu-rakugai/DB/kohon_research/kohon_people_DB.php（二〇二二年一一月一四日アクセス）参照。

［画像出典］

【図13～15】『遊びの流儀―遊楽図の系譜―』（サントリー美術館、二〇一九年）

「常陸名所図屏風」画像協力　奥州市牛の博物館

［主な参考文献］

展覧会図録『茨城の宝Ⅰ』（茨城県立歴史館、二〇一六年）

展覧会図録『松島・天橋立・厳島　日本三景展』（「日本三景展」実行委員会、二〇〇五年）

猪岡萌菜「〈歴史随想〉「常陸名所図屏風」をめぐる「忘却」と「発見」」（『千葉史学』六九、二〇一六年）

猪岡萌菜「「常陸名所図屏風」の表現意識―近世名所図屏風の系譜に照らして―」（『美術史』一八三、二〇一七年）

奥平俊六『新編名宝日本の美術二五　洛中洛外図と南蛮屏風』（小学館、一九九一年）

小澤弘『都市図の系譜と江戸』（吉川弘文館、二〇〇二年）

川崎和明「久慈浜の偉人三代芳松の日記に「常陸名所図屏風」を見る」（日立市郷土博物館『市民と博物館』一一八、二〇一六年）

金貞我「風俗表現における図様の伝統と創造―東アジア風俗画資料の作例から―」（『人類文化研究のための非文字資料の体系化』〇三、神奈川大学二十一世紀COEプログラム研究推進会議、二〇〇六年）

黒田日出男『謎解き洛中洛外図』（岩波書店、一九九六年）

佐野みどり「絵巻にみる風俗表現の意味と機能」（秋山光和博士古稀記念論文集刊行会編『秋山光和博士古稀記念　美術史論文集』便利堂、一九九一年）

武田恒夫『日本の美術二〇　近世初期風俗画』（至文堂、一九六七年）

原口知武「「常陸名所図屏風」についての考察」（『茨城県立歴史館報』四四、二〇一七年）

福岡市博物館「市美×市博　黒田資料名品展Ⅳ　藩主夫人が愛した文物」http://museum.city.fukuoka.jp/sp/exhibition/500/

（二〇二二年一一月一四日アクセス）
馬渕美帆『絵を用い、絵を創る―日本絵画における先行図様の利用―』（ブリュッケ、二〇一一年）
村松山虚空蔵堂創建千二百年記念実行委員会編『村松虚空蔵堂創建千二百年記念　村松山虚空蔵堂縁起』（村松山虚空蔵堂、二〇〇七年）
綿引逸雄「常陸名所図屏風シリーズ」一～一四（日立市郷土博物館『ひたちの大地に　ふるさと散歩』五七～七一、二〇一六～一七年）

小津久足の文事と徳川光圀 ―「右文」の時代の水戸藩―

添田　仁

天保一一年（一八四〇）三月、水戸藩を旅した松坂商人の小津久足が著した紀行文『陸奥日記』を分析し、彼の目に映った水戸藩の風土や風景の特徴について、徳川光圀の文事との関わりをふまえて明らかにした。久足にとって水戸藩は、光圀が生み出した唐様の景勝や建築が織りなす、国際色豊かな風景が広がる地であった。とくに文事については、和漢や身分の違いに拘らず、思想の多様性を尊重し、多彩な交流のなかで新たな知を創造しようとする学問風土が市井にまで浸透した、久足にとっては理想的な地域性を備えた地であったことがうかがえる。「尊王攘夷」の地という単純なイメージにとどまらない、水戸藩の新たな「見え方」を示した。

はじめに

本日は、「小津久足の文事と徳川光圀―「右文」の時代の水戸藩―」というお話をさせていただきます。「文事」というのは聞きなれない言葉かと思いますが、ひとまず学問とそれに付随する営為という程度で理解しておいてもらえるとよいでしょう。

まずは、報告の視角について確認しておきましょう。これまで水戸藩を訪れた人々の研究は、旅人の記録を集めて、水戸藩の風土や風景を復元したり、記述の当否を検証したりすることを主たる目的とした研究が中心でした。それについて重要な成果が積み上がってきているということは言うまでもありませんが、厳密に言えば、旅人の記述というのは、本人の経験や趣向に制約される、

そういった側面がありまして、はたしてその記述を鵜呑みにしてよいのか、観察者の記録をどう客観的に理解すればよいのかという課題を依然として残しているようにも思います。今後は、これまでの成果に学びつつも、旅人の個性や主観を丁寧に踏まえながら、旅日記で描かれる水戸藩の特徴や、わざわざ水戸藩に足を運ぶ、その意味を解明する必要があるのではないかと考えています。このような観点での研究は、幕末、特に後期水戸学を学びにやってきた遊学者については見られるのですが、それ以前の時期については、ほとんど確認できないのが実情ではないでしょうか。

そこで、本報告では、天保期に水戸藩を旅した稀代の紀行家、小津久足という人物に注目し、彼の個性や主観をできるだけ丁寧に踏まえて、彼の目に映った水戸藩の風土、風景を復元してみたいと思います。また、久足にとっての水戸藩への旅の意義を明らかにすることを通して、江戸時代の水戸藩が備えていた魅力の一端を紹介したいと考えています。

ただ、稀代の紀行家とはいっても、この小津久足という人物を知っている人はあまりおられないのではないかと思います。精力的に研究を進められている菱岡憲司氏の成果によりながら紹介しておきたいと思います[1]。

小津久足、伊勢松坂（三重県松阪市）の生まれで、通称は新蔵、与右衛門、号を桂窓といいます（以下、久足と略記）。彼の表の顔は、江戸店持ちの豪商、干鰯問屋湯浅屋の六代目当主、与右衛門。当時の指折りの肥料会社の社長、会長です。彼は嫡流ではないのですが、本家の当主たちが早くに亡くなったことなどもあって、一九歳で当主を継いでいます。小津という名前を聞いて、勘のよい方はお気づきだと思いますが、湯浅屋というのは映画監督、小津安二郎を輩出した家です。

久足の文事、彼の学問の特徴ですが、まず大変多彩ということです。詠歌、小説受容、蔵書、そして紀行文。特に紀行文については、一九歳のときから三五年間の間に、四六編もの紀行文を執筆しています。ただ、出版されたものはありません。どうやら限られた友人の間でのみ読まれていたようです。出来が悪かったわけではありません。たとえば戯作者の曲亭馬琴、彼は辛口評で有名なのですが、久足の紀行文については、大変高く評価しています。

彼の文事のもう一つの特徴が、出身地の松坂で和歌と古学を学んできたということです。伊勢松坂は伊勢神宮も近く、古学が盛んなところです。久足も一四歳から、本居宣長の子の春庭に師事していました。春庭が亡くなった後も、春庭の子の有郷の後継人になるなど、松坂生え抜きの豪商たちが作る本居サロンの中核メンバーとして活躍していました。

小津久足という人物で興味を惹かれるのは、三一歳のとき、長い間学んできた古学から少しずつ距離を置くようになるという点です。その理由について、菱岡氏は、久足が古学に対して疑いを持ち始めたからと指摘し、そのような久足の姿勢を「古学離れ」と呼んでいます。

実は、この久足の「古学離れ」が、今日のお話の重要な柱の一つですので、少し詳しく説明しておきます。そもそも古学とは、どのような学問だったのでしょうか。辞書の記述を要約すると、次のようなことになると思います。すなわち、江戸中期くらいから興った学問の一つで、古事記、日本書紀、万葉集など古代以来の古典を研究し、儒教とか仏教などのような海外で生まれた考え方が渡来する以前の、日本古来の文化や考え方とはどのようなものだったのかということを解明しようとしたものです。国学とも呼ばれました。

本居宣長という人は、その著書、古事記伝の中で真意（まごころ）の重要性について説いています。真意というのは、人間が生まれながらに持つ素直な心のこととされます。対して、この真意の邪魔をするものを漢意（からごころ）と呼んで嫌います。漢意とは、海外から輸入された考え方のことで、具体的には、儒教や仏教などが想定されています。砕いて言えば、日本人たるものは、海外から輸入された儒教や仏教のような考え方に毒されるのではなく、日本人が本来的に備えた固有の考え方を重視すべきである、という考え方ですね。このうち、日本固有の考え方というところを神道と結びつけたのが平田篤胤の復古神道で、これが幕末の尊王攘夷運動の精神的支柱となっていたことは、ご存じの方も多いのではないかと思います。

三七歳の久足は、自分が学んできた古学について、次のように述べています。

【史料1】『陸奥日記』、文末

廿あまりのほどは、かたはら古学にも志ふかゝりしかども、ふとうたがひおこりて、古学といふことは、むかしより聞えぬことなるを、近来つくりまうけたるみちなりと、おもひあきらめしより、「やまとだましひ」「まごゝろ」「からごゝろ」などいふ、おほやけならぬ名目のかたはらいたくなりて、私のみおほきその古学の道はふつにおもひをたちて

【史料1】は、天保一一年（一八四〇）、久足が江戸深川から松島まで旅した際に著した紀行文『陸奥日記』です。[2] 本日の報告の中心的な史料ですので、詳しくは後述します。

傍線部で、古学というものは昔から聞いたことがないことを近年になって創り出した学問であると思い至った、と彼は言っています。「大和魂」「真心」「漢意」という実質を伴わない言葉を見苦しく思い、古学の道とはもう決別をしたというのです。つまり、古学は信ずるに足りない学問であると。大和魂、真心、漢意を根拠のないものだと断じています。

菱岡氏の研究によれば、彼の本居国学に対する不信感というのは、本居宣長の著作の記述を調べたとき、実際の地理とはかけ離れている記述を見つけたことから生まれたもののようです。もちろん久足は、本居宣長の学問を完全に否定したわけではありませんが、一方で机上の論に過ぎないのではないかという疑念を少しずつ深めていったようです。

前置きが長くなってしまいましたが、久足は、少し複雑な悩みを抱えながら水戸藩にやってきたわけです。このことをふまえて、彼の水戸藩への旅を分析してみたいと思います。

一　陸奥日記と徳川光圀

小津久足の『陸奥日記』について紹介しておきましょう。先にも述べたように、三七歳の久足が江戸深川から松島に旅した際の紀行文です。紀行文研究の大家である板坂耀子氏は、これを「江戸時代の紀行の到達点[3]」と高く評価しています。松尾芭蕉のような飾った文章ではなくて、まるで貝原益軒のように写実的で実用的、大変に近世らしい紀行文と評価されています。

久足の「古学離れ」が始まるのが三一歳頃からですから、『陸奥日記』を書いた頃には、彼の「古学離れ」もかなり進んでいます。菱岡氏は、『陸奥日記』の特徴として、それまで久足が本居国学の門人として、どこかセーブしてきた記述を解放して、古今、和漢、そして雅俗にこだわらず、あけすけな物言いをしていることを指摘しています。彼は思ったことを素直に、飾らず、遠慮なく記述するわけです。そのことを示す史料を紹介しておきましょう。

【史料2】『陸奥日記』、三月七日条

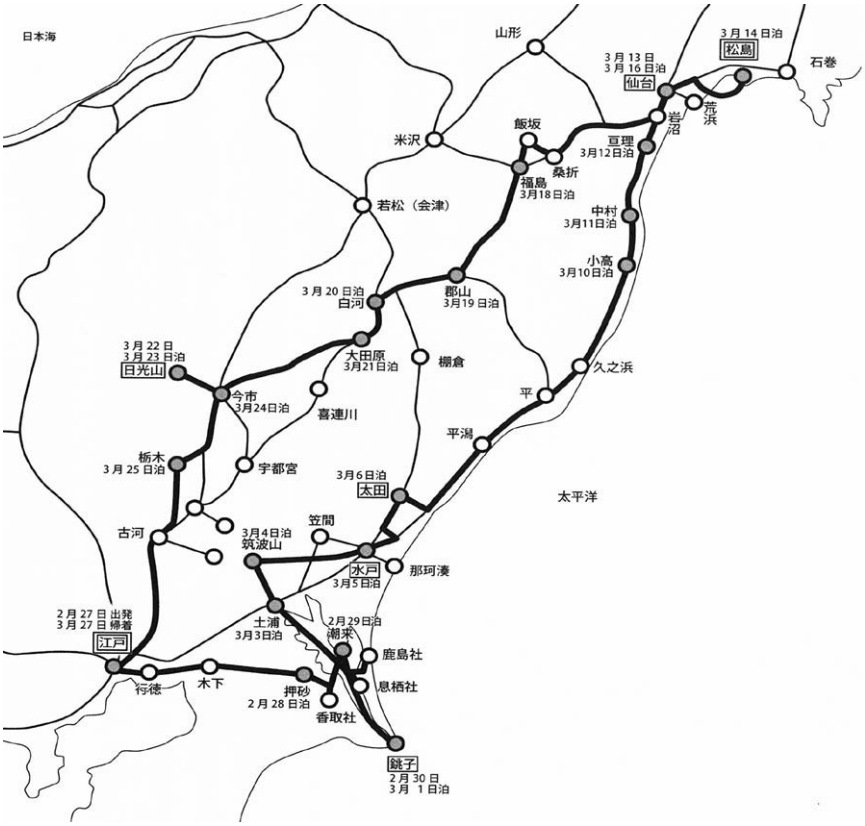
御廟のいかめしくめでたきさま、久昌寺の都にもまれなることなど、いみじくほむれば、宿の主は鼻あかめて、いたくよろこびがほなるも、わがさとよしとのみおもへる田舎人には、さもこそとおもはる

太田（常陸太田市）の奈良屋という宿に泊まったときの記述です。久足が、宿の主人に対して、その日に見た水戸徳川家墓所の瑞龍山、そして久昌寺のすばらしさを伝えたところ、宿の主人は地元の名所を褒められて照れていたのです。その様子を見て久足は、「さすが田舎者だよね」といったようなことを書いています。こういったところを見ると、久足は性格の良い人とは言えない、とも思えてしまいます。

さて、久足の旅程を確認しておきましょう。二月二七日に江戸を出て松島に向かい、三月二七日には江戸に戻っています。【図1】でルートを確認してください。

久足は、江戸から松島への往路に水戸藩に立ち寄ります。江戸から陸前浜街道を北上して松島に行き、東北道を南下して戻っています。このうち茨城のあたりに見ると、鹿島詣をした後、霞ケ浦を渡って、途中で筑波山、そして、水戸に立ち寄っています。そして、水戸から少し不自然に太田を経由してから陸前浜街道に乗る、というルートを取っていることが分かってもらえるかと思います。

水戸と太田への旅は、他でもない光圀ゆかりの地を巡る聖地巡礼でした。【表】は、陸奥日記の中で久足が立ち寄った、または話題にした水戸藩の名所、旧跡を時系列に並べたものです。表の



【図１】小津久足『陸奥日記』行程概略図（陸奥日記刊行会編『小津久足 陸奥日記』より転載）

【表】水戸藩における久足の足跡

日程	自治体（市）	名所・旧跡
2月29日	（香取→）潮来	長勝寺→遊女町（あやめ踊り）
2月30日	潮来→神栖（→銚子）	息栖神社＊
3月3日	（銚子→）鹿島→潮来→土浦	根本寺→神宮寺→降魔山（護国寺）→鹿島神宮＊→御斎殿（物忌館）→〔普門院地蔵堂〕→〔浮島〕
3月4日	土浦→つくば	八坂神社→報恩寺（法雲寺）→〔高崎大明神〕→〔城跡（小田城跡ヵ）〕→知足院→中禅寺→みなの川→筑波神社男体宮→筑波神社女体宮
3月5日	つくば→水戸	白滝不動→〔稲田神社〕
3月6日	水戸→常陸太田	祇園寺＊→七面山→偃湖暮雪碑→弁天堂→神崎寺→舜水堂→柳堤＊→吉田神社→〔浄鑑院〕＊→〔天神社〕＊
3月7日	常陸太田→日立	檀林（三昧堂）＊→久昌寺＊→西山荘＊→旌桜寺＊→瑞龍山＊→倭文神宮（大甕神社）→〔水穴（諏訪水穴）〕→〔はだか島（栄蔵小屋）〕＊
3月8日	日立（→いわき）	〔山部なにがしの城（助川海防城）〕→塩竈神社→天妃堂（磯原天妃尊）

［典拠］小津久足『陸奥日記』、天保11年（1840）2月29日～3月8日。
［註１］「名所・旧跡」のうち太字・下線は、『陸奥日記』に光圀との関係が記されている場所。
［註２］同じく〔　　〕は、『陸奥日記』で話題にはしているものの、立ち寄ってはいない場所。
［註３］同じく＊は、安藤朴翁『ひたち帯』にも登場する場所。

一番右側「名所・旧跡」という項目のうち太字で下線を引いているものが、久足が立ち寄った、もしくは話題にした際に、光圀について触れている場所です。水戸から太田、そして陸前浜街道に出て、いわきの勿来に抜けるまで、何度も光圀を話題にしながら旅をしていたということが分かってもらえるのではないでしょうか。

徳川光圀を知らないという人はほとんどいないでしょうが、今日は台湾から参加されている方もいますので、念のために確認しておこうと思います。

徳川光圀、水戸藩二代藩主です。海外の方でも「水戸黄門」という名前は聞いたことがあるのではないかと思いますが、そのモデルになった人物です。本日の報告テーマである「文事」との関わりで言えば、彼は彰考館を開いて多くの学者を集め、全国で史料調査を行って、日本の歴史を研究し、歴史書『大日本史』を制作したことは有名でしょう。また、国学者の契沖という人に命じて万葉集の注釈書を編纂したことでも知られています。

それでは、久足の光圀愛を感じてもらおうと思います。久足は光圀の隠居所である西山荘を見た後、感動しながら次のように述べています。

【史料3】『陸奥日記』、三月七日条

かく道をまはりたづねきたるは、すなはち名所なり。すべて**西山公のゆゑよしあるところどころは、さばかりふるきあたりならぬも、われは名所古跡のごとくにおもへり**。名所古跡といふは、ふるくゆゑよしあるところのことゝのみおもへる人もあれど、そはかたくなにて、ゆゑよしをかしき所は、きのふのことも古跡なるべし

遠回りをしたのは、まさに名所のためであると言います。徳川光圀ゆかりの地は、それほど古いものでなくても、全て名所や旧跡のように思える。名所・旧跡というと、古い由来がなければならないと考える人もいるが、それは愚かなことで、心惹かれる由来がある場所は、たとえ昨日のことであっても旧跡であると言い切ります。久足にとって光圀ゆかりの地は、わずか一五〇年ほど前のものであっても名所・旧跡だったのです。私たちで言えば、明治初期頃のものということになるでしょう。確かに少し新しく感じるかもしれません。しかし久足は、名所・旧跡というものは古いことが重要というわけではないと断じています。一体、古い由来がなければならないと考える人というのは、誰のことなのでしょうか。久足の「古学離れ」の姿勢と関わって、本居国学に対する皮肉を読み取れるようにも思います。

二　小津久足が観た水戸藩

小津久足は、水戸藩で何を見て、何を思い、何を語ったのでしょうか。彼が立ち寄った名所・旧跡について、水戸の祇園寺、舜

水堂、柳堤を紹介します。

まず祇園寺です。祇園寺は、徳川光圀に招聘された明の学僧東皐心越を開山とする禅宗、曹洞宗の寺院です。安政五年（一八五八）に七堂伽藍は焼失しましたが、かつて光圀が建立し、心越が明から持ってきたという金剛像を安置した建物と、中国の航海神である天妃尊などが現存しています。詳細については、参考資料を適宜ご参照ください。

開山の東皐心越という人は、中国浙江省金華府生まれの僧です。当時、明から清へ王朝が変わる中で日本に亡命し、長崎の興福寺に身を寄せていました。その後、徳川光圀の請いを受けて水戸に移っています。仏教はもちろん書画、篆刻、琴楽などにも優れて、水戸藩への文化面での貢献は多大であったとされています。祇園寺には心越の廟も現存しています。

【史料4】『陸奥日記』、三月六日条

関帝廟・如意輪堂などありて、いらかものふりたり（中略）敷瓦のさまいとからめき、額聯などかずおほく、ことごとくはしるしあへず。すべて黄檗宗めきたるつくりなれど、宗旨は曹洞宗なり。そのさま、この宗に似げなきは、この寺の開山は心越禅師なればなり（中略）この寺より盗賊除の札といふをいだすは、「漢寿亭候」とゑりたる印をおしたるにて、文字のさまふるくみゆ。この禅師は「寿亭候」の後裔なりしこと明らかなれば、かの地より将来の印なるべし。こは黄金印なりとぞ。（中略）もとよりこの寺は、よにめづらしきならひにて、経は唐音にてとなへ、よの曹洞宗にはたがひ、わたくしに「から宗」ともとなへ

久足は、祇園寺の様子を克明に記録しています。とくに、祇園寺が禅宗の寺でありながら、禅宗の寺らしくないと記しています。具体的には、境内に関帝廟があること、建物も敷瓦は唐風で、額聯も数多くあって、まるで黄檗寺院の造りのようであると書いています。それは開山が明の学僧の心越だから、と指摘しています。

祇園寺では盗賊除の札として「漢寿亭候」（三国志の関羽）と刻んだ印が押されたものを配っていること、その印鑑は金印であること、そして金印は、関羽の子孫として有名な東皐心越が明から持ってきたに違いない、とも記しています。さらに興味深いことに、経を唐音、中国語のような音で唱えており、一般の曹洞宗とは異なって、唐宗とも呼ばれているのだ、とも書いています。

史料中では「からめきたる」という表現で説明されるのですが、いわゆる中国風（黄檗風）の寺院の外観をしていたことがわかります。また、経も唐音で唱えられていたようですから、まるで中国に来たような雰囲気の寺が、この水戸の町にあったということになります。

続いて、舜水堂です。舜水堂は、徳川光圀に招聘された明の学者の一人、朱舜水を祀った祠堂です。貞享元年（一六八四）に光圀が江戸駒込の水戸徳川家中屋敷内に建てましたが、火事で焼失

したため、正徳二年（一七一二）に水戸上町に移設されました。舜水堂講釈なども行われ、水戸藩の重要な教育機関の一つでもありました。

【口絵4】は、水戸市立図書館デジタルアーカイブで公開されている水戸城下町の絵図のなかの舜水堂です。周りには桜が多く植えられていたようで、絵図中にも桜の描写が見られます。

朱舜水についても見ておきましょう。中国浙江省余姚出身の学者です。やはり明から清への王朝交代の中で南明の復興を画策しますが、失敗します。一六五九年に長崎に亡命し、その後は日本で暮らしました。寛文五年（一六六五）に徳川光圀によって水戸藩へ招聘され、光圀はじめ彰考館の学者たちと深く交わり、水戸藩の学問の進展に大きく寄与したとされます。光圀は舜水を師と仰いでおり、『舜水先生文集』という舜水の遺稿をまとめた書物において、光圀は主君でありながら、彼の門人として名を連ねています。

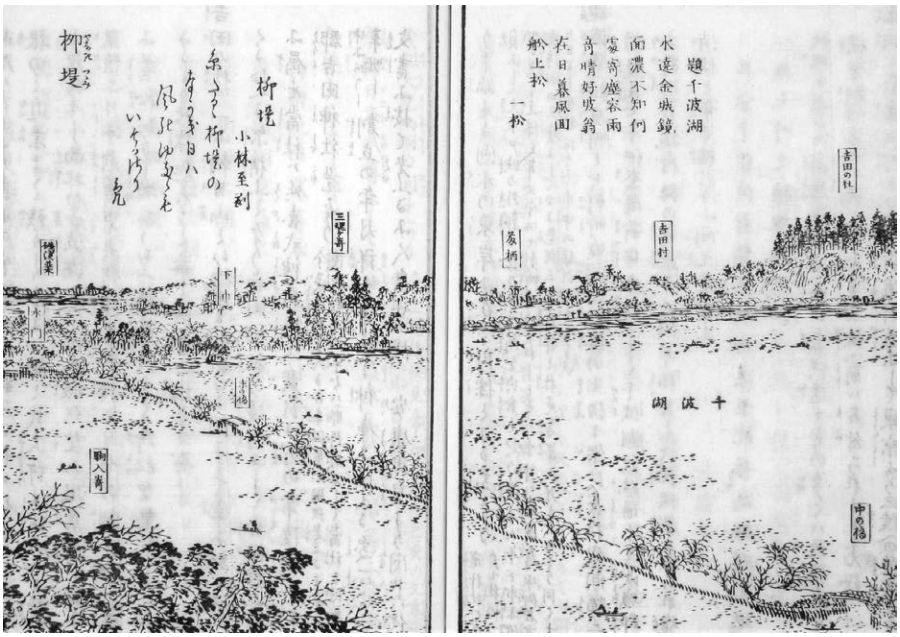
久足は、舜水堂についても記しています。先ほどの祇園寺と同じく、舜水堂も唐風、つまり中国風の建物としています。そして、特に強調していることが、先ほど紹介した『舜水先生文集』の序に光圀が門人として名を連ねていたことでした。これこそ光圀の文事には、身分の隔たりがないことを示しており、とても恐れ多いことであると感じ入っています。

久足にとって舜水堂は、人種や身分の違いを超えて展開した光圀の文事を象徴する唐風の建築であったと言えるでしょう。現在、舜水堂の痕跡はなく、ＮＴＴ東日本の茨城支店前に朱舜水の像が建っているだけです。舜水堂が消えたのは明治初期と推定されますが、詳細は不明です。

最後に柳堤です。柳堤は、慶安四年（一六五一）に水戸藩の初代藩主徳川頼房が、水戸の上町と下町の間の通路を便利にするために千波湖に築いた堤のことで、新道とも呼ばれました。繰り返しますが、築いたのは光圀の父親の頼房です。光圀は、この新道の両側に柳を植え、元禄三年（一六九〇）に柳堤と命名しました。

【図2】は、明治一八年（一八八五）に作られた名所案内『常磐公園攬勝図誌』に載る柳堤です。千波湖の奥に吉田の社が見えますから、これは現在の水戸東照宮の辺りから水戸駅南辺りを見た風景だと思います。千波湖を東西に横切るように描かれた道、これが柳堤です。

久足は、柳堤についても記しています。柳堤に植えられた柳が大変に美しいと春の風景を称賛したのち、光圀の伝記『桃源遺事』の記事を参照しつつ、これは徳川光圀が西湖を模して築き、柳も植えたとしています。西湖とは、中国浙江省杭州市の湖でして、そこに宋の時代に築かれた蘇堤があります。光圀は、これを模して柳堤を築いたと指摘します。そして、そのようなことができる光圀は、並々ならぬ風雅を備えた君であって、ほかに誰がこのようなことをなし得ようか、とまで感嘆しているのです。久足にとって柳堤は、西湖の蘇堤を模した景観を水戸に生み出した光圀の風雅を象徴する構造物だったと言えます。



【図２】柳堤と千波湖
明治18年（1885）『常磐公園攬勝図誌』（茨城大学図書館所蔵）

ただし、先ほど確認したように、実際に柳堤を築いたのは、光圀の父親の頼房だったことには注意が必要でしょう。確かに『桃源遺事』には柳堤のことが記されています。しかし、それを築いた人については記述がありません。おそらく久足はこれを読み間違えて、光圀の功績に加えてしまったのでしょう。ちなみに柳堤については、『水戸百年』という水戸の古写真を集めた冊子に、それらしきものが載っていますが、大正期の千波湖の埋め立てによって姿を消したと言われています。

三　和漢融合の水戸藩

これまで見てきた久足の姿勢と、光圀の名所・旧跡めぐりの旅は、どのような関係にあったのでしょうか。水戸藩を「和漢融合」という観点から見つめ直してみたいと思います。

久足が『陸奥日記』のなかで水戸藩領内でのみ使っている言葉があります。それは「右文の徳化」です。「右文」と「徳化」とは、どういう意味かということですが、「右文左武」という言葉があり、これは文を尊び、武を重んじること、文武両道を兼ね備えることを指しています。つまり、辞書的な意味で「右文」は「文事、学問を重んじ尊ぶ」ということです。一方、「徳化」とは「徳によって感化すること、また徳に感化されること」を指します。

では、久足はどのような場所で、また、どのような意味で「右文の徳化」という言葉を使っていたのでしょうか。ここでは久足

が訪れた「僊湖暮雪の碑」、そして「酒屋の看板」を取り上げて詳しく見ていきましょう。

まず「僊湖暮雪の碑」です。水戸藩九代藩主の徳川斉昭は、藩領内の景勝地のうち八ヶ所を水戸八景と選定し、その場所に斉昭自筆で名所名を隷書の銘を刻んだ石を置いたのですが、これもその一つです。ご存じの方も多いと思いますが、この「僊湖暮雪の碑」は現存しています。さきに紹介した『常磐公園攬勝図誌』にも載っています【図3】。

【図3】僊湖暮雪の碑
明治18年（1885）
『常磐公園攬勝図誌』（茨城大学図書館所蔵）

三月六日に「僊湖暮雪の碑」を訪れた久足は、次のように記しています。

【史料5】『陸奥日記』、三月六日条

梅の中を一丁ばかりゆけば碑ありて、石面に「僊湖暮雪」と隷書にてかゝせたまへるをゑりつけたるは、則今の殿の御筆にて、御手蹟よにもすぐれて見えさせたまふ。こは御領内、八所にたてたまへるなるよし。かのから国の康熙の帝の西湖のためしおぼえて、右文の徳化いとめでたきことなり。西山公は御著作のかずおほく、いづれ有益の書ならぬはなくして、かの帝に似させたまへることもおほきに、そのゝち又も、かゝる殿のいでさせたまへるは、いともあふぐべき御事にて、御政事も西山公の御時にかへしたまはんの御心しらひにて、その御時のためしのごとく、江戸にのみおはさず、このころはこゝにもおはすとぞ。

石碑の表に「僊湖暮雪」と隷書で刻まれているのは、現在の殿様、つまり当時の徳川斉昭の御筆であって、とても優れている。斉昭という殿様は、このような石碑を領内八ヶ所に建てたというが、これは清の康熙帝による西湖の前例を連想させるもので、右文の徳化がなせる業であり、すばらしいと高く評価しています。「僊湖暮雪の碑」を見て久足の脳裏に浮かんだのは、中国の西湖十景だったようです。西湖は先ほど柳堤のところで見た蘇堤があ

る湖です。この十景は、南宋の時代に画題の風景地として選定され、清の四代皇帝、康熙帝が真筆を刻んだ石碑を置いたことで知られています。久足は、このように清の皇帝の事蹟に倣った取り組みこそ「右文の徳化」のなせる業だと言います。久足の中国愛のようなものも感じませんか。

ただ、その褒め言葉は、直接斉昭に向けられたものではなかったことにも注意が必要です。久足は、続けて次のように言います。徳川光圀の著作は多く、いずれも有益なものばかりで、康熙帝に似ていることも多いが、光圀の後に、また斉昭のような殿様が現れたことは敬うべきであるというのです。つまり、光圀が清の優れた皇帝とよく似た事績を積み重ねることによって育んだ水戸藩の風土のおかげで、斉昭のような殿様も現れて何より、といったようなニュアンスですね。

さて「右文の徳化」について、もう一つ確認しておきましょう。三月六日、水戸の下町で久足が目にした酒屋の看板についてです。

【史料6】『陸奥日記』、三月六日条

ある家の門に酒うるなるべし、「名酒出門倒」「名酒透瓶香」と両面にかけるが、ふとめにつけり。かゝる看板かゝげたるも、右文の徳化あまねき御国風、たふとむべし

ある家の前で酒を売っているのか、看板の両面に「名酒出門倒」「名酒透瓶香」と記してあるのが、ふと目についた。このような看板が市中に掲げてあることも、光圀の「右文の徳化」が庶民の間に行きわたった地域性を示しており尊い、とあります。この意味の分かる方、どのくらいおられるでしょうか。

「出門倒」「透瓶香」とは、明代の白話小説『水滸伝』に登場する酒の名前です。登場人物の一人、梁山泊の武松が、ふるさとに帰る途中に立ち寄った酒屋で飲んだ地酒なんです。店に掲げられたのぼりの両面に「透瓶香」、これは瓶を通り抜けてくるほどの香り、「出門倒」、これは三杯以上飲むと、門を出たとたんに倒れてしまうほどの強さという意味なのですが、そのように記されていたのです。三杯以上は飲まないよう注意する店主を遮って、武松が飲み干してしまうほどのうまい酒ですが、この後、武松はフラフラに酔ったまま人食いトラと戦わないといけないことになってしまいます。

それにしても、このような看板、現在皆さんが目にして意味が分かるでしょうか。はたして酒屋の宣伝になるのでしょうか。大事なことは、当時の水戸の人びとがこの看板を見て、おいしい酒を想像し、購買意欲を掻き立てられていたということです。つまり久足は、『水滸伝』のような中国渡来の文学作品が人々の知識として定着していたことに感じ入ったのではないでしょうか。ここでも久足の中国愛を感じます。

以上の二つの事例から、久足の言う「右文の徳化」の意味を考えるに、それは単に文事、学問を重視する水戸藩の風潮を指しているわけではない。それは和漢、すなわち日本と中国の差別をし

ない徳川光圀の文事によって、明・清の学問や文化を積極的に取り入れる志趣が庶民にも浸透していたことを指す言葉ではないでしょうか。久足の目に映ったのは、光圀の文事によって生み出された風土や風景が「国風」（地域性）と呼べるほどに違和感なく定着した水戸藩だったと言えるでしょう。

さて、これまでの内容をふまえ、久足がなぜ水戸藩を旅したのかという点についてまとめておきたいと思います。

私は、久足の水戸藩への旅は、光圀伝説を検証する旅でもあったと考えています。光圀伝説とは何でしょうか。徳川光圀が水戸黄門という名前でお茶の間のヒーローになるのは明治以降ですが、実はそれ以前、つまり江戸時代から、光圀は名君として広く知られていました。とくに江戸後期、幕藩制社会が停滞して改革機運が高まる中で、光圀の功績が伝記、言行録、逸話の書写、さらには旅人の口コミなどによって、名君としての光圀が時に美化されながら拡散し、結果として光圀が庶民の間で広く慕われた、ということが知られています[4]。久足は、そのような光圀の事績に関わる文献を博捜して読んだ上で、どこまでが史実であり、どこからが虚構なのか、虚実を検証しなければならないと考えていたのではないでしょうか。

三月七日、水戸と太田を見巡った後、久足は次のように述べています。

【史料7】『陸奥日記』、三月七日条

まことにきのふけふ見めぐりし所々のさまの、よにもことなるさま、かばかりたゞしき風の今にのこれること、まつたくこれ義公の御余沢の千とせをかけてうせざるしるし、とすゞろに感をもよほしつ。その外このちかき御領内に、たづねまほしき義公の御遺跡いとおほけれど、陸奥かけてのみちゆきぶりには、かなひがたくて、又かさねてこのあたりにのみ、ふりはへて来たらまほしくおぼゆ。かくおもふも、つねに西山公の徳をしたひ奉りて、そのすぢの書は、めのおよぶばかりはあなぐり見て、かねてより名をしれるところどころおほければなり。

久足は日々光圀の徳を慕い、関連する書物を博捜して読んできた、それゆえに水戸藩には以前から名を知る光圀ゆかりの地が多い、と述べています。では、光圀の名所、旧跡を実際に見て検証した結果は如何に。久足は、水戸や太田で観た場所の様子が格別であり、これほど良い風潮が現在も残されているということは、徳川光圀が残した御余沢（恩恵）が長い間失われていない証拠である、と感動しています。まさに「百聞は一見に如かず」。久足は現地を見て、いわゆる光圀伝説のすべてが伝説ではない、ということを確認したのでしょう。机上の論ではなく、「百聞は一見に如かず」の精神で伝説や神話の地を歩き、自分の目で真実を見定めたい。光圀伝説の検証は、冒頭に述べた久足の「古学離れ」とも無関係ではなかったものと思われます。

そもそも、なぜ久足は光圀に対して敬慕の念を抱いていたのでしょうか。もちろん理由は一つではないですが、ここでは「古学離れ」と「右文の徳化」という二つのキーワードにこだわって、二人の関係について考えてみましょう。

小津久足の歌論書に『桂窓一家言』があります。詠歌にあたり、久足が重要だと考えていたことが二二七条にまとめられているのですが、その三三条に次のような言葉があります。

【史料8】『桂窓一家言』（菱岡憲司「翻刻『桂窓一家言』」、前掲『小津久足の文事』所収）

和学者がからをそしるもおかしく、又儒者が日本国をおとしむるもおかし。まことに皇統の一すぢに神代よりたえさせたまはぬは、から国のおよぶべきことにはあらず。又**文化の盛なることは、日本のおよぶべきにあらず**。歌も文も文華のうちなれば、歌人の漢意をそしること心あるべし。

和学者が中国を批判するのはおかしいし、一方で、儒者が日本を見下すのもおかしい。中国の文化が盛んなことは、日本の及ぶところではない。歌人が「漢意（からごころ）」を非難することは、わきまえなければならない、と言います。

儒教や仏教を否定する本居国学に対する、久足の明白な反駁が読み取れて興味深いと思います。水戸を歩いた久足が記していた中国愛を表しているかのような表現は、このような考えに基づいたものではないでしょうか。

これに共鳴していたのが光圀の考え方です。水戸徳川家の墓所である瑞龍山では、光圀の墓の傍に、「梅里先生寿蔵碑」なるものがあります。梅里先生とは光圀自身のこと。寿蔵とは、生前に自分で造っておく墓のことです。光圀の生前墓ですね。この生前墓には、興味深いことに、光圀が自分の人生を振り返ってまとめた「自己紹介文」が刻まれています。その一部に、次のようにあります。

【史料9】宮田正彦『水戸光圀の『梅里先生碑』』（錦正社、二〇〇四年）

神儒ヲ尊ンデ神儒ヲ駁シ、仏老ヲ崇メテ仏老ヲ排ス。

この碑文を丹念に読み解いた宮田正彦氏は、「神道も儒教も仏教も道教も、それぞれに勝れた内容をもつ思想体系であることはよく理解し尊重するが、どれか一つに拘わることなく、それぞれについて自分自身の判断を持っています。」と訳した上で、「それぞれに優れた思想体系であることを理解し尊重するが、盲信せず、理に合わないところは批判する」と絶妙な解釈をしてくれています。当該の部分は、光圀が碑文の文案を検討する際、担当者に対してこの部分だけは修正しないように強く命じたことが知られています。近世思想史研究の大家である尾藤正英氏は、これこそ多様な思想傾向を含み込み、全体としての思想的統一性を持たない

ことで、学問、思想の個性を尊重し、多彩な交流を生み出すことができていた光圀の思想的な特徴を示す部分であると指摘しています。かかる光圀の姿勢は、久足の「古学離れ」とも共鳴する考え方であったと言えるでしょう。

あらためて、なぜ久足は水戸藩を旅したのか。久足の「古学離れ」は、光圀に対する敬慕の念と深く関わっていました。彼もいわゆる光圀伝説から完全に自由ではなかったでしょう。しかし、久足は「百聞は一見に如かず」の精神で、伝説の虚実を検討する必要性を認識し、水戸や太田に迂回し、光圀の名所・旧跡を訪ねたのではないでしょうか。結果、文献で読んできた光圀の事績のなかに史実を見出し、その恩恵が久足の時代の水戸藩にも息づいているように見れることを確認できたわけです。水戸藩への旅は、久足自身が目指す文事の意義と方向性を見極める旅であったと考えておきたいと思います。

おわりに

久足にとっての水戸藩への旅は、光圀の事績の虚実を見極め、自身が目指す文事の意義を確認する機会だったと考えておきたいと思います。とりわけ、光圀が実践した「和漢融合」を尊重した文事、そしてその余沢を自分の目で確かめることは、重要な目的の一つだったのではないでしょうか。

水戸藩を訪れた久足の目に飛び込んできたのは、唐様の建築物や構造物が織りなす「カラフル」な風景でした。そして、和漢にこだわらず多様な学問や思想を尊重し、多彩な交流で新たな知を生み出そうとする光圀以来の水戸藩の学問風土でした。少なくとも久足の目には、国際的な魅力と、多様性を認め合う精神を備えた「右文」の地として水戸藩は映っていたのです。

しかし、久足が訪れた天保期以降、水戸藩は「右文」から「左武」へと大きく政治のかじを切らざるを得なくなります。最も大きな要因は、外圧でしょう。ときの藩主斉昭が、厳格な海防政策に加えて、領内で排仏政策を推し進めたことはよく知られています。久足が観た「和漢融合」の風景も、かかる極端な政策や尊王攘夷のスローガンの下で展開した幕末の動乱のなかで姿を消していきました。久足が著した『陸奥日記』は、水戸藩の「右文」の時代を物語る「墓碑銘」ということができるのではないかと思います。

私の報告は以上です。ご清聴、ありがとうございました。

［註］

（1）菱岡憲司『小津久足の文事』（ぺりかん社、二〇一六年）所収の同「陸奥日記」（初出は「小津久足「陸奥日記」について」『語文研究』九八、二〇〇四年）を参照。

（2）本稿では、陸奥日記研究会編『小津久足 陸奥日記』（東北

大学大学院文学研究科東北文化研究室、二〇一八年、以下『日記』と略記）を用いる。引用する際の年代表記は、断らない限り天保十一年（一八四〇）である。

（3）板坂耀子『江戸の紀行文』（中央公論新社、二〇一一年）、二六五頁。

（4）野口武彦『徳川光圀』（朝日新聞社、一九七六年）、金文京『水戸黄門「漫遊」考』（講談社、二〇一二年）。

［主な参考文献］

青柳周一「天保期、松坂商人による浜街道の旅－小津久足『陸奥日記』をめぐって」（平川新編『江戸時代の政治と地域社会』二、清文堂出版、二〇一五年）

板坂耀子「貝原益軒と紀行文」（『江戸の旅と文学』、ぺりかん社、一九九三年）

同「さまざまな文体」（『江戸を歩く』、葦書房、一九九三年）

同『江戸の紀行文』（中央公論新社、二〇一一年）

古文書学習会編『道中記に見る江戸時代の日立地方』（日立市郷土博物館、二〇〇八年）

鈴木暎一『徳川光圀』（吉川弘文館、二〇〇六年）

瀬谷義彦『水戸の光圀』（茨城新聞社、一九八五年／新装版二〇〇年）

高橋陽一「他領民の藩認識―水戸藩領への旅行者を事例に―」（『宮城学院女子大学研究論文集』一三二、二〇二一年）

名越時正『水戸光圀』（日本教文社、一九六六年／新装版一九八六年）

同『水戸光圀とその餘光』（錦正社、一九八五年）

野口武彦『徳川光圀』（朝日新聞社、一九七六年）

菱岡憲司『小津久足の文事』（ぺりかん社、二〇一六年）

菱岡憲司・村上義明・吉田宰編『小津久足資料集』（雅俗の会、二〇一九年）

菱岡憲司・高倉一紀・浦野綾子編『石水博物館所蔵 小津桂窓書簡集』（和泉書院、二〇二一年）

尾藤正英「水戸学の特質」（『日本の国家主義―「国体」思想の形成』、岩波書店、二〇一四年）

堀辺武「旅人たちが見た村松宿（現東海村村松）」（『郷土文化』四四、二〇〇三年）

同「旅人が見聞した岩城相馬街道沿いの民俗」（『茨城の民俗』四三、二〇〇四年）

同「旅人が見た江戸時代の水戸地方」（『郷土文化』四八、二〇〇七年）

陸奥日記研究会編『小津久足 陸奥日記』（東北大学大学院文学研究科東北文化研究室、二〇一八年）

水戸史学会編『水戸義公傳記逸話集』（常磐神社、一九七八年）

水戸市史編さん委員会編『水戸市史 中巻（一）』（水戸市役所、

一九六八年）
水戸市史編さん委員会編『水戸市史 中巻（二）』（水戸市役所、一九六九年）
水戸市史編さん委員会編『水戸市史 中巻（三）』（水戸市役所、一九七六年）
宮田正彦『水戸光圀の『梅里先生碑』』（錦正社、二〇〇四年）

［追記］添田仁「小津久足の文事と徳川光圀―右文の時代の水戸藩―」（『五浦論叢』二九、二〇二二年）では、シンポジウム当日は割愛した内容も含めてまとめました。茨城大学学術情報リポジトリ（ROSE）で閲覧できますので、ご参照下さい。また、小津久足については、菱岡憲司『大才子 小津久足』（中央公論新社、二〇二三年）が刊行されました。そちらについてもあわせてご参照下さい。

たどり合う戦国の記憶 ―佐竹西家の由緒調査と水戸領民―

高村恵美

正徳五年（一七一五）、佐竹西家家臣が旧領である常陸国北部を訪れた際の旅の記録『常陸御用日記』や彼らの書簡から、土着し水戸藩領民となった旧臣の子孫たちは、近世期においてもなお旧主との由緒結合を求めていたことを明らかにした。また、戦国時代の「部垂の乱」で敗死した佐竹氏の一族 部垂・小場両城主の墓所の管理と移転をめぐる一件では、佐竹西家の意を汲んだ小場村と長く墓所を管理した部垂村、両村の由緒意識の違いから対立が引き起こされた。近世の村社会において、旧主との由緒を求める人々の連帯と矛盾が現出した一例を検討した。

はじめに

常陸大宮市文書館の高村と申します。私のほうからは、「たどり合う戦国の記憶―佐竹西家の由緒調査と水戸領民―」というタイトルで、中世に水戸藩地域を所領としていた佐竹氏の家中が、その旧領を訪れたときの公用記録である『常陸御用日記』[1]（以下『日記』と略記。）という史料を素材にお話をさせていただきます。

慶長七年（一六〇二）、佐竹氏が出羽国秋田へ移封となりました。それから一一三年後の正徳五年、常陸国小場を旧領とする佐竹西家の家臣がこの地にやってきました。『日記』は、このとき記された、陸奥国須賀川から秋田藩江戸屋敷への一か月にわたる旅の記録です。この記録から、彼らの旅の様子と、水戸領民の対応、その旅の意義について検討したいと思います。

まず、史料により確認できる佐竹家中の常陸訪問について概観

します。

最初の記録は、元禄一〇年（一六九七）に、秋田藩士大和田内記、中村与助らが来訪した際のもので、この記録は『金砂紀行』としてまとめられ、複数の写本が作られました。[2]

このときの行程は、秋田藩の江戸藩邸を出発して水戸藩領に至るもので、この目的について『金砂紀行』を紹介された根岸茂夫氏は、「秋田藩は寛文期以降、家中の家格を確定することを目的として系図調査を行い、さらに元禄九年以降の網羅的な調査において、系図、古記録等の提出を求めた。この一環として領外調査が行われた。[3]」として、家中の家格を決定するための調査であり、のちの修史事業に大きな影響を与えたことを指摘しています。

二つ目は、今回取り上げる正徳五年の小場家（佐竹西家家中）による常陸訪問で、この成果が『日記』として伝わることになります。

行程は、出羽国大館を出発し、須賀川（日記の記述は須賀川から始まる）水戸藩領、筑波郡小田を経て江戸の秋田藩邸に至るというものでした。これについて、『大宮町史』は、「国替え以前の小場家系を正し、常陸時代の治績を究明するもの」と記しているように、常陸時代の旧記を収集し、小場氏歴代の事跡を明らかにすることを目的とした旅であったことが指摘されていますが、史料紹介的な記述にとどまるものでした。

秋田藩の修史事業と藩士の由緒調査について研究されている天野真志氏は、二〇二〇年の論考で、秋田藩において、家譜編纂や家中統制を目的とした文書改めが元禄期以後行われる過程で、戦国期にさかのぼる由緒調査の一環として領外調査が行われたとし、小場氏の初代をめぐって、佐竹南家との席次を争う中で、史料の不足を補うために現地での史料調査が行われ、この結果、『日記』が生まれたと明確に位置付けられました。[4]これにより、漠然と「国替え以前の小場家系を正す調査」であったとされていた常陸への来訪は、小場氏の元祖が義躬であるか義久であるかという問題を中心とした積極的な由緒調査であったということが明らかにされました。

以上のように、佐竹家中による常陸訪問は、佐竹一門及び家中の由緒調査を目的として、秋田藩の修史事業が開始される一七世紀後半から一八世紀前半にかけて行われました。ただし、元禄一〇年、正徳五年ともに、これまでの研究の主体は秋田藩側の事跡を追うものであり、彼らの来訪が水戸領民に与えた影響など、水戸藩側からの考察が必要であるといえるかと思います。

一　正徳五年の常陸来訪

それでは『日記』の記述について具体的に見ていきたいと思います。『日記』は、大館城代を務めた秋田藩佐竹西家の家臣平山半左衛門春芳と前小屋民部忠利が下士を伴って常陸国を来訪した際の道中記であり、調査記録です。この記録は、佐竹西家に提出され、写本が現存しています。常陸では、かつて居城としていた

那珂郡小場村に一五日間滞在し、小場村と周辺地域を調査しています。

【表1】は、『日記』に記された主な調査地と面会した人物を表にしたものです。須賀川から矢吹、棚倉を南下し、棚倉以南は南郷道を南下して小場を目指しますが、奥州南部からは佐竹氏の旧領に入ることもあり、経由する地域でたびたび聞き取り調査や史料閲覧を行っています。注目していただきたいのは、【表1】の網掛け部分です。平山と前小屋は、基本的に庄屋や村の協力者に小場氏や佐竹氏の譜代家臣の子孫、ゆかりの寺社の情報を聞き取って、対象者を訪ねていくのですが、彼らの来訪を聞きつけて村人が自ら訪ねてくる場合がありました。これは、後述するもう一つの常陸来訪記『金砂紀行』の記述には見られないもので、地元の人々の小場氏への受け入れの姿勢として注目されます。彼らとは、大館に戻った後も、書状による交流が続くことが確認できます。

この由緒調査の目的は、先ほども御紹介した天野氏の研究により、秋田藩文書所による由緒調査に触発された一族・家中各家の独自の動きであったことが明らかにされています。

ただ、『日記』中における両人の説明は「秋田より常州へ身類（親）有之江戸登序ニ立寄」（六月三日条）や、「上方仏詣致候序ニ小場家之法名不相知儀も有之候間承届度心懸ニ而参候」（六月八日条）など、由緒調査を公にしていません。水戸徳川家が領主となった当地域に対し、かつての領主の家臣が来訪し、旧臣たちと再び結びつくことへの配慮があったのではないかと考えられます。

平山と前小屋は、具体的にどのような調査を行ったのでしょうか。まず、居城であった小場城跡や小場義実が自害したとされる部垂城跡、前小屋城跡などの城跡を見分しています（六月一〇日・一一日条）。また、小場村の村人に話を聞く中で、小場氏の初代が義躬と伝承されていることや、具体的な城跡の遺構、三重堀や埋沢、北沢といった天然の堀を利用した堀跡、本丸などの曲輪、隣接する寺地などの情報を収集しています。

正徳五年の来訪で、平山と前小屋が注意を向けている点の一つに、部垂の乱の伝承の確認と採録があります。部垂の乱については後述しますが、戦国期に小場氏七代の義実が参戦して自害に追い込まれた佐竹氏の内訌です。六月一〇日条では、平山がその聞き取りのために部垂村に出向いていることがわかります。小場城主の歴代法名についても調査しており、六月九日条では、小場村にある小場氏の菩提寺の一つ臨済宗伝灯院で、小場氏二代・五代・六代の当主夫妻の位牌を見学し、法名を写し取っています。同日には同村の曹洞宗常秀寺を訪問し、部垂の乱で自害した七代義実・法名高巌常秀、そして義実の子で常秀寺を開基した八代義忠・法名長雄常久の二人の位牌を見学しています。

小場氏関連史跡の中でも、小場氏に関わりの深い寺がこの二つで、滞在中に何度も訪れています。江戸時代に廃寺になってしまいましたが、現在も小場地内にその跡が残っています。

このように、小場氏について調査する中で、佐竹宗家や江戸氏のゆかりの旧家の由緒についても調査しています。特に国替えで

【表１】常陸御用日記による訪問地

月日	訪問地・経由地	詳細
6/3	須賀川―箭吹―堤村―棚倉村	和田安房守子孫豊田左馬介所蔵の官途状見学（堤村）、近藤姓につき問合せ（堤村）、古城（棚倉）、チカツ明神につき問合せ、会津商人管屋与右衛門へ小場への道筋・太田古城問合せ
6/4	棚倉―矢つき―関岡	八槻都々古別神社見学
6/7	関岡村―下小川村	
6/8	下小川村、部垂村、小場村	小場村庄屋安藤佐次右衛門に安藤氏、宗福寺、伝灯院、常秀寺、小場城について聞き取り
6/9	小場村	伝灯院・常秀寺訪問（小場氏代々位牌調査）
6/10	部垂村、小場村	部垂村立原佐左衛門訪問（小場義実生害の所伝、古書付、法名等調査）、小場城見学、山伏正学院来訪
6/11	小場村	茅根久右衛門来訪、下根本村斎藤重右衛門訪問（斎藤、前小屋、関石見、前小屋譜代、平山次郎衛門について問合せ）、前小屋城見学、平山次郎衛門訪問、
6/12	小場村	小林小左衛門来訪（横倉名字、小林氏について問合せ）、下江戸村齋藤権兵衛訪問（江戸家について問合せ）、向山村綿引藤右衛門訪問、同村中川豊後子孫訪問
6/13	小場村	茅根久右衛門の招きにより訪問（宇留野孫右衛門、高瀬氏、皆川氏について問合せ）
6/14	小場村	常秀寺の招きにより訪問、小場義躬の御影を借用
6/15	小場村	石塚萬照寺訪問、皆川平八来訪、所吉兵衛訪問、安藤弥中来訪
6/16	太田村	太田村、増井正宗寺訪問、宿孫右衛門に佐竹連枝の城跡について問合せ
6/17	小場村	正宗寺調査、部垂村甲明神・古城見学、部垂の乱の伝承について問合せ、高久・安士姓、部垂義元宿老について問合せ
6/18	小場村	伝灯院･常秀寺訪問、小林小左衛門･向山村百姓共が来訪（酒宴）
6/19	小場村	茅根久右衛門・小林小左衛門・綿引惣左衛門・佐久間久悦来訪
6/20	小場村	小林小左衛門、茅根久右衛門、正学院来訪（小場元祖の申し伝えについて問合せ）
6/21	小場村	雨天のため小場氏家臣の記録を整理
6/22	小場村―水戸中谷町	小場出発、正学院・小林小左衛門見送り
6/23	水戸―府中	水戸城、吉沼清音寺、府中泊
6/24	小田	小泉新左エ門宅滞在、遍照院（義実所縁の本尊）・竜昌院訪問、小林弥五右衛門来訪、大熊姓・大山姓来訪
6/25	布施村	布施村泊
6/26	江戸馬喰町	仙台屋三郎兵衛、表具屋伝右エ門（義躬御影表具直し～ 6/29）
6/27－29	秋田藩江戸屋敷	
7/1	江戸出発、秋田へ	
7/10	久保田着	
7/12	大館着	

※「来訪」は相手方が前小屋・平山らを訪問、「訪問」は前小屋らが相手を訪問した意に表記した。ただし史料上の表記とは異なる。

※　　は前小屋らが村人の来訪を受けた、または招かれて相手方を訪問した記載。

秋田に移った家と常陸に残った家について、両者の縁戚関係がわかる場合は古文書を見せてもらうよう依頼して調査をしています。例えば六月八日条では、小場村の庄屋安藤佐次右衛門家に逗留した最初の聞き取り調査において、安藤家は大山譜代であり、川上石見という人物が先祖であることを聞き取っています。また、これより前の六月三日条では、陸奥国の矢吹において和田昭為の子孫と名乗る人物と出会い、古文書を閲覧しています。佐竹氏にゆかりを持つ人々に広く接触を図っていることがわかります。

次に、佐竹西家家中を受け入れた水戸藩領の人々の対応について、村人と水戸藩の対応に分けて見ていきたいと思います。再び【表1】をご覧ください。六月一〇日に山伏正学院が、同一一日に茅根久右衛門が、前小屋と平山に面会を求めてきています。さらに同一二日には小林小左衛門、一五日に皆川平八・安藤弥中など、前小屋らを訪ねてくる人々は連日見られ、積極的に接触を図っています。自らの由緒を直接確かめようと訪問した人が数多くいました。帰国を四日後に控えた六月一八日には、伝灯院、常秀寺で酒が振舞われ、村人も「酒肴持参」で酒宴が催されました。かなり歓迎されていることがわかります。『金砂紀行』の内容を検討された根岸氏は、元禄期の秋田藩士の調査においても、村人はおおむね協力的だったことを指摘しています。(5)

一方で根岸氏は、『金砂紀行』では、土着した旧臣の子孫たちが、秋田藩士に親愛の情を持って接するのに対して、彼らの水戸領民に対する姿勢は半ば冷淡であったとしています。水戸領に土着した旧臣たちからすれば、旧主に連なる秋田藩士との交流により、自家の由緒が正統化され、権威付けられ、それを村内に誇示するまたとない好機だったことでしょう。一方で、自家の由緒を語る誇大な、あるいは虚構の逸話は、かえって秋田藩士に不信を抱かせ、それが冷淡な態度につながった、と根岸氏は指摘しています。

次に、水戸藩側の対応を見ていきたいと思います。【史料1】は、平山・前小屋が、七日にわたる逗留について、水戸藩の反応を懸念し、安藤佐次右衛門に問い合わせた内容です。

【史料1】正徳五年『常陸御用日記』(秋田県公文書館蔵)

(前略)

一同日(六月十三日)宿左次右衛門ニ申候ハ最早六、七日も罷有て他国之者緩々居候而自分之為ニ不罷成事も有之候哉、左候ハヽ余方へ可参候由申候へハ、左次右衛門申候ハ、拙者茂気遣成儀ハ無之候へ共脇方より御代官へ被知申候而ハ如何ニ存候故内々先日申遣候ハ、秋田より侍衆御両人上方仏詣之序ニ先祖之法名御糺シ被成度ニて宿御頼故宿仕候、近所之寺々其外由緒抔御尋ニ御座候、御仕置等々儀ニ而も何ニ而も余之儀ハ御咄も無之候、緩々逗留被成度と御座候、如何可仕候哉と御代官へ窺申候へハ左様之事ハ何方ニも有之候間、気遣不申宿申様ニと御座候間、御心易き日も御逗留可被成候、何方へ御出候而も御気遣無御座候由申候間一入心易罷有候事

これに対して、佐次右衛門が郡奉行所に問い合わせたところ、問題ない旨の回答があったと書かれており、水戸藩は佐竹西家の調査を問題視しないという姿勢を取っています。

一方、『金砂紀行』に書かれた元禄一〇年の常陸来訪では、水戸城下の寺社の参観を希望した佐竹家中の大和田と中村に対し、許可しない旨の回答を水戸藩側が出しています。外側から見るようにと指示しており、二人が逗留していた町の役人も、奉行所の回答がなければ対応できないという姿勢を示していて、佐竹家中の調査に消極的な様子がうかがえます。

これについて根岸氏は、「旧主佐竹氏が、中世以来の伝統的な事跡と旧臣との関係を明らかにすることは、支配の正統性を持たず、儒教的倫理を強化しながら支配の正統性を確立しようとしている水戸藩にとって、迷惑な調査であったに相違ない。」「秋田藩の調査は、水戸藩が否定したものを再度掘り起こすものであった」と指摘しています[6]。

次に、小場氏にゆかりの深い旧臣家との交流に注目し、事例として小場村の三村家との交流について見ていきたいと思います。三村家には、平山・前小屋の常陸来訪後、大館に戻った二人と交わした書状が七通伝わっています。当時の三村家当主である七平の先祖伊賀は、佐竹本家の女性が小場氏へ輿入れする際の附人として小場へ来たとされる人物で、佐竹宗家と小場家の両方に所縁を持つことになります。

このような由緒を持つ三村七平は、先祖が付き添ってきた二人の女性、小場氏三代義信の正室の法名徹渓妙悟、同じく六代義積の正室の法名月渓妙清、この二人の菩提を弔ってきました。

享保元年（一七一六）には、七平が伝灯院の開基である六代義積の石碑と位牌堂を寄進し、先祖が仕えた義積正室の菩提を弔っています。

【図1】は伝灯院跡に残る六代義積夫妻の墓碑（供養塔）です。石碑の裏面に「享保元丙申年七月日／本願冨州祖饒代／三村伊賀末孫／石施主／同七平」と刻まれています。

【図１】小場義積及び室墓碑（供養碑）
常陸大宮市小場・伝灯院跡

【図３】経机　常陸大宮市 三村家蔵

【図２】御影堂　常陸大宮市 三村家蔵

【図２】は、三村家では「御影堂」と呼んでいる厨子です。平山・前小屋の来訪の翌年、正徳六年に三村七平が伝灯院に寄進したもので、現在は三村家が所蔵しています。内部に銘文があり、小場氏の秋田移封により、旧主をしのんで位牌を納める厨子を作ったこと、子孫は修造を重ねて持ち伝えるべきことが書かれています。

【図３】は同年に三村庄左衛門が伝灯院に寄進した経机です。三村庄左衛門と七平との関係は不明ですが、一族であったと思われます。

【図４】は、三代義信の室徹渓妙悟の菩提のため造られた地蔵菩薩像です。底部に墨書銘がありますが、年代や造像主、寄進者は不明です。また、三村家には六代義積の室月渓妙清の位牌が伝わります。ただし図２の厨子とは大きさが合いません。

このように、平山・前小屋の帰国後もその影響は残り、引き続き小場の人々と二人の間に書状の往復が行われています。【史料２】は平山と前小屋が伝灯院に宛てた書状です。

【図４】木造地蔵菩薩坐像
常陸大宮市 三村家蔵

【史料2】享保二年カ四月二八日　伝灯院宛平山・前小屋書状
（常陸大宮市・三村家文書一三）

（前略）去夏中之御芳情難忘会合之度ニ申出候御事ニ御座候、且又拙①者共其御地へ出足之以後猶御穿鑿被成置候へハ従二代目六代迄相続御位牌御安置之旨、殊更徹渓妙悟之御影有之由承知倍々大慶仕候、徹渓妙悟ハ佐竹本家十五代伊予守義俊之息女共姉共申候、卒之年月不相知罷有候、定而卒之年月等可有之候間、早速之便ニ被仰下度候、右之妙悟之導師ハ正宗寺第十一世御住侶景恕ト書記御座候得共卒之年月者無御座候、猶御吟味被遊候而被仰下度候、右御影ハ絵像ニ御座候哉、木像ニ候哉、是又承度奉存候、（中略）御②参会之節小左衛門（小林）・久右衛門（茅根）・弥十（安藤）方・正学院其外へも書状程ニ御心得被下度、乍慮外千万奉頼申候、（後略）

①の記述によれば、二人が大館に帰った後も、現地での調査は地元の人々によって続けられていたことがわかります。

また、②の記述から、平山・前小屋らは、常陸滞在時に一行を訪問してきた旧臣の子孫（【表1】参照）、小林小左衛門、茅根久右衛門、安藤弥十、山伏正学院らとの書状による交流も継続していたことがわかります。

このような家々との交流は、天野真志氏がこれまでの研究で明らかにされた、地方に散らばった一門、旧臣の子孫の家々との由緒調査を通じた交流ともつながるもので、佐竹西家の調査に、彼らのような積極的に由緒を欲する水戸領民の存在が大きかったということがわかります。

以上、まとめますと『常陸御用日記』は、佐竹西家の由緒調査にまつわる御用遂行の記録であり、この内容の検討から、訪問を歓迎する村人と静観する水戸藩が浮かび上がってきます。村人側は自家の由緒獲得の好機として積極的な接触を図ろうとし、これは旧主佐竹氏と小場旧臣としての村人個人との由緒の確認、旧主・祖先顕彰の正当性を確認しようとするものと見ることができます。

一方で、水戸藩は、否定した佐竹氏の事跡の掘り起こしを危惧し、調査には消極的だったようです。

二　小場義実遷墓一件

次に、江戸時代中頃に起きた小場義実の遷墓に関する争いについて、お話したいと思います。概要と争点をまとめますと、以下のようになります。

寛保元年（一七四一）、戦国期の佐竹氏の内紛である部垂の乱（一五二九～一五四〇）で敗れて自害したとされる小場城主義実の墓を部垂村から小場村常秀寺に遷そうとする常秀寺の住職大車と、それを阻止しようとする部垂村役人、部垂の旧臣の子孫らの争いということができます。

部垂の乱について簡単に説明しておきます。享禄二年

（一五二九）、佐竹一六代義篤の弟宇留野（部垂）義元が、義篤家臣の小貫俊通を攻め、部垂城を奪取したことを発端とする一二年に及ぶ内訌です。天文九年三月一四日の総攻撃で義元が自害、子の竹寿丸が殺害されて、部垂城に居合わせた（一説に加勢のため参戦）小場義実も自害します。これにより部垂氏は断絶し、部垂城は廃城となりますが、小場氏と小場城は存続していきます。

【史料3】文化三年　美ち草（『美ち艸（復刻版）』（雨宮瑞亭著、十王町一村一文化創造事業推進委員会復刻、二〇〇〇年）

（前略）

一部垂村鎮守甲明神（中略）①佐竹義舜第三子四郎義元部垂ニ食邑す、兄義篤へ叛心有之状を讒する者あり、依之太田より部垂を攻む、防戦利あらす、天文九年子三月十四日父子自殺す、同姓式部太輔小場義実時ニ来て此城にあり、ともに戦死すと云、②義元之臣石沢河内守・立原筑後守、義元父子之遺骨をおさめ葬る、其霊を祭りて八幡の祠を立、別当慈眼院を置く、其祭りをつかさとらしむる処、淫祠破却の数ニ入て延宝四辰年廃ス、其祠ハ村鎮守の宮中末社となる

（後略）

部垂の乱は、水戸藩の複数の地誌に取り上げられ、江戸時代後半には知られた史伝でした[7]。内容としては、①のように、義元が本家佐竹氏の兄に叛心を起こして討たれて自害し、居合わせた義実も自害したというものです。

敗れた部垂義元、竹寿丸、そして小場義実の遺骸は部垂の家臣が埋葬し、部垂にあった慈眼院が墓所を管理していました。【史料3】②のように、この遺骸の埋葬と墓所の管理は、「義元之臣石沢河内守・立原筑後守」らが担ったと記されています。ですが、延享二年（一七四五）、小場義実の墓は小場村に改葬されます。

【史料4】文化四年　水府志料（小宮山楓軒著、『茨城県史料近世地誌編』）

八田組　部垂村　戸凡三百二十九／水戸迄六里

（中略）

古城　佐竹十六代義舜の三男掃部助四郎義元の居城なるよし、（中略）又小場の城主式部大夫義実、此時城中に在て討死せしと云、本家へ敵対たる死骸、小場へ引取がたく、此地に葬、高巌常秀大禅〈定〉門神儀といへる石碑、義元父子の石碑と共に此地にありしが、延享中、小場村常秀寺へ送り、今はなし（後略）

義実が部垂村に葬られたのは、本家へ敵対したため居城である小場城下で手厚く葬ることが憚られたためでした。ではなぜ二〇〇年後に改葬することになったのでしょうか。

争いの推移を見ていきます。小場村に隣接する三美村の庄屋中崎家は小場氏の旧臣家です。この家に本一件の訴訟書類が残されています[8]。争いの当事者は、遷墓を企図した小場村常秀寺の僧の大車、遷墓に抵抗していくのは、部垂義元・小場義実の墓が整えられた部垂村の庄屋、立原伝重です。伝重は、部垂義元の宿老立原筑後守の子孫で、墓所の管理者でもありました。訴訟書類は、この二者と、当時の佐竹西家当主である佐竹義村とその家臣、そして水戸藩の寺社奉行・郡奉行の往復書状からなるものです。

双方の主な訴えについて見ていきます。この訴訟史料は寛保元年（一七四一）から延享元年（一七四四）まで四年にわたるもので、論点も多いのですが、ここでは五通の史料から一部を抜き出して、その経過を見ていきたいと思います。

まず、寛保元年の常秀寺大車の訴状を見ていきます。水戸藩の寺社奉行所を経由して小場氏一五代にあたる佐竹西家の義村に送ったものです。

【史料5】寛保元年一〇月　佐竹石見宛常秀寺書状（中崎家文書A（二））

（前略）

一唯今迄石碑立候場所之義者部垂村館跡畠之隅小塚之上ニ寄置候、指当リ可致世話筋之者外ニ無御座候ニ付、草藪之内ニ打捨リ在之候、以来者没所ニも可罷成候哉、（中略）

一本紙ニ奉願候改葬之儀万一難被　仰付筋ニも御座候ハヽ、右之石碑御削被下候様ニ奉願候、然る上者拙僧方ニ而如何様ニも石碑造立可仕候、（後略）

部垂村にある小場義実の墓が寂れ、管理する者もないので小場村に改葬したい、それが無理なら現在の墓碑は廃棄し、小場村に墓碑を新造したいということを義村に伝えています。

これに対し、寛保二年、佐竹西家家中から常秀寺大車に返書が届きます[9]。小場村へ改葬することを許可し、部垂村の現在の墓所を柵で取り囲むか、または小場村常秀寺に新造してもよいとし、墓の移転料や柵の造作料として金五両が与えられました。

続いて寛保四年に常秀寺から寺社奉行に出した書状では、墓の移転の相談を進めてきた常秀寺側が驚くような事態になっていることが記されます。

【史料6】寛保四年二月　寺社奉行所宛常秀寺書状（中崎家文書B（一―一））

（前略）墓所江再参仕候所最前之石碑者不相見無字之碑面安置候ニ付驚入、（中略）次ニ無名之碑取替候旨趣承候へ者是又存寄有之立替之旨相答候、然所伝重儀者何方之御役所へ相伺得御指図常秀寺開基之石碑ヶ様我侭に取計候哉、若訳も有之形付立替候ハヽ、拙僧方へ茂一往之届者可然事ニ候、剰石碑之儀者堀江打込候共又ハ削捨候共拙者勝手次第と申踏付候上に致麁云、（中略）廃墟旧墓取蔵、正碑立替謀碑候上者弥堀

江打込被削捨候、同所之義唯今に至秋田江之返答も可仕様無之迷惑至極奉存候事（後略）

常秀寺が寛保元年一〇月一四日に部垂村墓所に参ったところ石碑がなく、無字の碑面が建っていた。部垂村庄屋立原伝重へ子細を訪ねたところ、考えがあって建て替えたという。もし訳があって片付け建て替えるならば、知らせるべきであろう。このように常秀寺大車は立原伝重の非道を訴えています。

これに対し、立原伝重は寛保四年二月の書状で以下のように反論します[10]。片付けた石碑については、墓所の印として建てたまでで、開基の碑つまり義実の墓碑ではないとし、部垂村に建っているものを（庄屋である伝重が）片付けるのは、勝手次第である、としています。却って、常秀寺が秋田の佐竹氏から墓石の引料を受け取ったことについて当惑しているとし、先祖である石沢河内・立原筑後両人が部垂義元・小場義実の葬送や建碑を行い、他家の主である義実を主同然に取り計らったものであって、常秀寺の住職の言い分は「常秀」という法名や寺号まで汚すものであると激しく非難しています。そして、改葬するといっても墓域から義実の遺骨だけ選び出すことは不可能であり、石碑も遣わすことはできないとして、強くこの改葬を拒否しています。

さらに、立原伝重は、以下のように訴えます。

【史料7】延享元年三月　乍恐書付を以奉申上候事（中崎家文書C（二））

（前略）

一三拾五六年以前秋田より前小屋民部・平山半左衛門と申仁小場へ被参候節部垂へ罷越廟参之砌両人より無断絶様ニ頼申候儀（中略）

且墓之儀度々掃除等者不相加候得共墓所之土地御改之節も御除被下置候程之義中々亡所と申候ニ者無御座候、

三五、六年以前、秋田より前小屋民部、平山半左衛門という者が小場へ来た際、部垂にも来て廟参りをした。そのとき両人より断絶しないようにと頼まれた。そのために今も墳墓を維持している、と主張します。

これについて、三〇年前にさかのぼる『日記』の記述を見てみましょう。

【史料8】正徳五年『常陸御用日記』（秋田県公文書館蔵）

（前略）

佐左衛門（六月一七日）所へ参候而御石塔之事尋申候へハ義元公御父子様・義実ノ石碑先年ハ竜元寺と申義元公之御位牌所ニ御石塔御座候所ニ竜元寺禿レ申候以後、義元公被成御座候御城之内ニ葬り申所御座候故、右御石塔拙者親共移シ申由ニ御座候、（中略）只今ハ御立林ニ被成候由ニ而竹繁り垣有之候、其内ニ御石塔三ツ有之候、二ツハ南へ向候故風西風ニ当リ苔むし文字見得

不申候、高巌常秀ト有之石碑ハ北向故歟慥ニ文字文字も見得申候、（中略）義元公悪心ト乍申御寺迄禿申候而如此之儀ハ哀成御事と申候而奉拝申候

部垂義元父子・小場義実の石碑は竜元寺が廃寺になった後、立原佐左衛門の親たちにより旧城内に移設された。竹藪の中に三基が建ち、二基は南向きで文字が読めない。これが義元父子の碑ではないかと思われます。一基は北向きに建っていて、「高巌常秀」という法名が彫られている。これが小場義実の法名です。義元は「悪心」だったが、位牌所がこのように荒廃しているのは哀れである、ということを平山と前小屋は書き残していたのです。

双方の訴えを要約します。常秀寺大車側は佐竹西家や水戸藩の寺社奉行所と連携し、強引な改葬計画を進めます。改葬の理由として、祀り方を挙げ、当初は、法名などもつけて寺で祀っていたものをのちに神葬祭になったことへの不満と、その石碑や墓所が粗末に扱われていることへの不満を述べています。さらに改葬を相談した庄屋立原伝重の対応にも不信感を抱いていることを書き連ねています。佐竹西家からの引料の受領も、改葬を中止できない理由として挙げています。

また、部垂の乱への小場義実の関わりについては、偶然の参戦であり、義実の意思で加勢したわけではないと主張しています。[11]「敵本家部垂へ加勢可仕儀曽以無御座候」として、義元への加勢を否定し、もし加勢していれば、早速に人数が向けられて、小場家も佐竹本家に潰されていただろうとしています。義実が亡くなったのは、偶然居合わせたことにより、士道によって自害したということを大車は主張します。

一方、立原伝重は、小場義実は加勢したという立場を取ります。

【史料9】寛保四年正月　乍恐書附を以奉願上候事（中崎家文書C（一））

（前略）其節小場之城主式部太輔義実公被及御聞為加勢当処江出陣被致於戦場同日打死被致候、依之当所之御家来共存知候者本主義元へ致加勢落命被致候儀ニ御座候得者厚恩と申、殊ニ一家之主人之儀難黙止、石沢河内・立原筑後両人家老職相勤罷在候身ニ御座候間、早速遺骨ヲ取納葬申候而当所之城主法名勝巌常俊、小場之城主者高巌常秀と石碑相建申候事一其後河内・筑後相続を以亡主幷小場殿之尊霊神ニ奉祭可然由申合奉崇大八幡・小八幡慈眼院と申社僧相立指置申候（後略）

伝重は、主君である部垂義元と加勢した義実を共に祀る墳墓の維持について、主である義元に加勢してくれたのであればこそ、厚恩と思い部垂の家臣たちが小場の城主を手厚く葬ったのだ、との思いを記しています。部垂の乱後の鎮魂と村政を担った伝重の先祖の姿勢を継承していると読むことができると思います。

このような経過を経て、延享二年に小場義実の墓は改葬に至っ

ています。正徳五年、西家家中が来訪した際、「両人より無断絶様ニ頼申候」と依頼されたということを根拠に、立原伝重は部垂村での墓域の継続を願うわけですが、延享二年に遷墓が実現し、延享五年には墓碑の傍らに遷墓碑も建立されました。遷墓碑は表面の剥落が激しく解読が難しい状況ですが、「大館」、「贈金」、「部垂邑吏」などの文字があり、順調に進まなかった遷墓一件について記されていることが推測できます。

以上、まとめますと、常秀寺大車による小場城主の墓石改葬について、部垂氏の旧臣側にとっては、彼らの由緒としての「部垂の乱の記憶」を奪うものとして、部垂旧臣側は抵抗したと考えられるかと思います。義元と、加勢した義実が自害し、家老の石沢河内、立原筑後が墓碑を建碑したことについては、主君への忠心の証としての建立であり、寺地改めにより慈眼院は廃寺となったものの、墓地は除地として残しました。これも旧臣たちの尽力の結果であるとして、帰農した伝重らの先祖が武家であった時代の由緒を語るものとして重視されたといえます。

一方で、小場村の由緒としての「部垂の乱の記憶」は、義実が部垂義元と同心して本家に反乱を起こしたことを否定するものであり、旧主小場氏に加え、佐竹本家への忠心から部垂家との合葬を拒否したものと言えるのではないかと思います。

おわりに

ここまで見てきたように、佐竹西家家臣の常陸来訪は、秋田に一〇〇年を暮らした小場氏の常陸時代の由緒をたどる旅でした。

彼等の来訪に対する水戸領民への影響ということで言えば、一つには個人の先祖崇拝、旧主顕彰を軸とした由緒意識の覚醒が指摘できると思います。例えば、平山・前小屋を訪ねてきた多くの小場旧臣の子孫たちや三村家のような存在にこれが見られるのではないかと思います。

元禄期、水戸藩は村落においても由緒調査を行っています。これによって、丸山可澄ら彰考館員らによる系図、旧記の調査と写しの作成が行われました。こうした旧家調査、由緒調査の対象となったのは、村役人層や村落内有力層で、その多くは佐竹旧臣、陪臣の由緒を持っていました。水戸藩はかかる由緒調査において、前領主と水戸領民との主従の絆を拾い上げざるを得ない状況が生まれていました。このような中で水戸藩は、佐竹西家における由緒調査を静観するという立場を取りつつも、村落支配の観点から、これらの由緒を持つ人々を初期には旧族郷士として取り立て、藩政秩序に取り込んでいきます。

一方で、先に見たような個人による旧主・先祖顕彰を軸とした縦型の由緒意識が、地域結合として現出したのが遷墓一件での部垂旧臣家の対応と言えるのではないかと思います。彼らは小場義実の遺骸の改葬について、石沢河内ら先祖の行為を継承する立場

から拒否し、それを旧臣らの総意によるものと主張しています。

では、小場村や常秀寺には、どのような意図があったのか。大車の訴えには墳墓の適正な管理を求めての改葬という意味合いがあったようですが、大車の背後には、平山・前小屋が来訪した際に積極的に関わりを持とうとした小場氏譜代の子孫たちの支援があったことが想像できます。

最後に、今後の課題として、水戸藩の旧家に残る「官禄証」という古文書について紹介したいと思います。主君から戦功により与えられる官途状、あるいは感状や知行宛行状などを擬したもので、内容としては、鎌倉から戦国時代の先祖の武功を示したものです。そもそも「官禄証」という古文書は存在しないということと、発給者の名に据えられた花押が全く異なることなどから、いわゆる偽文書であると考えられます。常陸大宮市内の旧家には、この「官禄証」と、記述が引き合う系図とを対で所持している家が複数確認できます。

これまでは、このような系図類は、村落で生きる有力農民が自家の由緒を飾るために所持したものとして、積極的に検討されることはありませんでした。しかし、佐竹西家家中の旧領への訪問というできごとを通して見るとき、このような史料を持つことで、旧主とのつながりを形として所持しようとする姿勢がうかがえます。複数の家が所持するという点からは、そういった地域的な広がりを想像することもできるかと思います。

『日記』に記された佐竹西家家中の旅について見てきましたが、これまであまり注目されてこなかった受け入れ側の水戸藩領民にとって、戦国期の先祖の記憶や、武家であった時代の由緒を呼び覚ますという重要な意味を持つものであったと評価できるものかと考えています。

以上で報告を終わりにします。ありがとうございました。

［註］

（1）秋田県公文書館蔵（A〇二八八－一八）。

（2）『金砂紀行』は秋田県公文書館蔵（混架辛－一七一）。この写本・類本に『金砂日記』（同館蔵、混架一四－一一七）、『金砂日記写』（同館蔵、狩一三四）、『元禄常陸草枕』（同館蔵、AT二九二－一）、『常陽経歴之日記』（同館蔵、AH二八八－一）がある。

（3）根岸茂夫「元禄期秋田藩の修史事業」（『栃木史学』五、一九九一年）。

（4）天野真志a「近世佐竹家中の歴史意識と常陸の記憶」（図録『佐竹氏 八〇〇年の歴史と文化』茨城県立歴史館、二〇二〇年）、同b「出羽国秋田藩の文書管理と由緒調査―佐竹家中による記憶と記録の探求」（『常陸大宮市史研究』三、二〇二〇年）。

（5）前掲註（3）根岸論文。

（6）前掲註（3）根岸論文。

（7）ほかに小宮山楓軒「水府志料」小場村・部垂村（『茨城県史料　近世地誌編』）、「常陸古伝条」（天保三年、東京大学史料編纂所所蔵史料目録データベース）等を参照。

（8）中崎家文書（常陸大宮市文書館寄託）。A「小場古城主佐竹義実改葬願一件記録　常秀寺願書之一」（寛保元年～同三年）、B「小場古城主佐竹義実改葬願一件記録　常秀寺願書之二」（寛保四年）、C「小場古城主佐竹義実改葬一件記録　部垂村庄屋伝重之願書」（寛保四年～延享元年）、D「小場古城主佐竹義実改葬願之義ニ付御用状幷羽州秋田エ文通取遣之写等」（延享四年）。

（9）寛保二年十二月　常秀寺和尚宛黒沢・佐賀書状（中崎家文書A（八－二））。

（10）寛保四年二月ヵ、大車「再答之覚」（中崎家文書B（二－二））。

（11）寛保四年二月　寺社奉行所宛常秀寺書状（中崎家文書B（一－一））。

［主な参考文献］

天野真志「秋田藩佐竹家中長瀬氏系図の成立と旧領常陸」（近代茨城地域史研究会編『近世近代移行期の歴史意識・思想・由緒』岩田書院、二〇一七年）

天野真志a「近世佐竹家中の歴史意識と常陸の記憶」（図録『佐竹氏　八〇〇年の歴史と文化』茨城県立歴史館、二〇二〇年）

天野真志b「出羽国秋田藩の文書管理と由緒調査―佐竹家中による記憶と記録の探求」（『常陸大宮市史研究』三、二〇二〇年）

茨城大学中世史研究会・常陸大宮市歴史民俗資料館編『館（たて）と宿（しゅく）の中世』（常陸大宮市教育委員会、二〇〇九年）

瀬谷義彦『水戸藩郷士の研究』（筑波書林、二〇〇六年）

高橋裕文「部垂の乱に関する伝承資料」（『茨城大学中世史研究』八、二〇一一年）

高村恵美「秋田藩士の故地来訪―『常陸御用日記』―」（高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、二〇一七年）

根岸茂夫「元禄期秋田藩の修史事業」（『栃木史学』五、一九九一年）

野上平『水戸藩農村社会の史的展開』（茨城新聞社、二〇一六年）

牡丹健一「部垂城とその周辺―水陸交通からみた部垂城の位置―」（『茨城大学中世史研究』八、二〇一一年）

山本英二「村の由緒、イエの由緒」（『日本歴史』六七三、二〇〇四年）

山本英二「近世の偽文書」（久野俊彦・時枝務編『偽文書学入門』柏書房、二〇〇四年）

大館市史編さん委員会編『大館市史　第二巻』（大館市、一九七八年）

大宮町史編さん委員会編『大宮町史』（大宮町、一九七七年）

茨城県史編さん近世第一部会編『茨城県史料　近世政治編Ⅰ』（茨城県、一九七〇年）

他領民がみた水戸藩 ―常陸の風土と光圀の遺沢―

高橋陽一

水戸藩の領地と領民に対する他領民の認識を、知識人が書き残した紀行文から明らかにしようと試みた。他領知識人は、水戸藩領を米の実りが豊かな土地であり、領民は礼節に厚く、質朴であると認識していた。また、実際にそう断定できるかは別にして、こうした領地の状況や領民の性質は徳川光圀の遺沢によるものだと認識されていた。これらは、従来の歴史研究の成果とは異なる、あるいは歴史研究で明らかにされてこなかった水戸藩領・領民への評価である。

はじめに

皆さん、こんにちは。宮城学院女子大学の高橋と申します。私は、経歴的には茨城県と直接関連はありませんが、今回のシンポジウムのテーマに関係する研究をしているということで、発表者に加えていただくことになりました。こうした機会をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

私は江戸時代の研究をしていますが、具体的には当時の旅行や温泉のことを調べたり、仙台藩の地域社会のことを調べたりしています。今回の発表に関わるところでは、江戸時代の東北地方からの伊勢参りですとか、関東地方から東北の松島への旅行者について調べてきました。

今回、改めて水戸藩領内の旅行者の動向について調べてみると、大変面白いことがいろいろと分かってきました。ほかの藩との例も比較しながら、お話したいと思います。実は水戸藩についてはかなり不勉強で、発表の最後に皆さんに分からないことを質問し

てみたいと思っていますので、いろいろと教えていただければありがたいです。基本的には、今回は学ぶスタンスで参加しています。

それでは初めに、シンポジウムのテーマになっている江戸時代の旅と常陸国を巡る状況について簡単にお伝えして、話のテーマをお示ししたいと思います。江戸時代は旅の時代といってもよい時代で、趣旨説明にもありましたが、現代のように旅行が大衆化した時代です。平和な時代が到来したとか、宿駅等の交通制度が整備されたとか、さまざまな事情がありますけれども、武士身分から庶民まで誰でも旅行ができるようになった時代です。代表的な目的地は伊勢神宮ですが、最盛期に年間約五〇〇万人が参詣したともいわれています。この時代の人口は最も多いときで約三〇〇〇万人ですが、そのうち伊勢参宮者だけで五〇〇万人なのですから、とてつもない数の人が全国を旅行していた時代だといえるでしょう。東北、関東地方からも、徒歩で数か月かけて多くの人が伊勢神宮などを訪れていたのです。移動手段が徒歩というのが現代との大きな違いですが、実はこのことが今回の発表ができる根本的な要因になっています。

常陸国を通行する旅行者ですが、どのような人が私的な旅行で常陸国を通行するかというと、東北からの伊勢参宮者と、関東から東北、北海道方面への旅行者ということになります。東北と関東をつなぐ街道といえばいわゆる奥州街道ですが、常陸国は奥州街道沿いにはありませんので、通行する旅行者が少なかったようにも思えます。しかし、そうではなく、それなりに旅行者は通行していました。その事情は、現代と江戸時代での旅行ルートの選定の違いにあります。どういうことかといいますと、江戸時代の旅行者は往路と復路でルートを変えることが多く、行きと帰りで同じ場所を二回通らないという特徴があります。添田さんのご発表で、小津久足のルートが説明されていましたが、久足も行きが江戸浜街道（岩城相馬街道）を通って松島へ行き、帰りは奥州街道を通って江戸へ戻っており、基本的には同じ場所を二回通らないようなルート設定をしています。

したがって、旅行者が関東と東北を往復する場合は、奥州街道と岩城相馬街道、あるいは棚倉街道を使い分けるのが一般的です。そのため、水戸街道、岩城相馬街道を利用する人が一定数おり、常陸国を通行していました。実際、旅日記を分析した研究によれば、常陸国を通行する伊勢参宮者は岩城相馬街道を通るケースが非常に多く、その次に棚倉街道、結城街道が利用されていたそうです[1]。これは東北からの伊勢参宮者の例ですが、私は逆に関東地方から松島へ向かう旅行者を調べてみました。すると、やはり水戸街道、岩城相馬街道、それから棚倉街道を利用する人が数多くいました。ルートは、小津久足のように奥州街道と併用するパターンになっていました[2]。

以上のような常陸国を巡る旅の状況を念頭に置いた上で、今回の発表テーマについて説明していこうと思います。まず、江戸時代の社会状況として確認しておきたいのは、この時代の日本は、

幕府領とか藩領というように、性質の異なるさまざまな領域に分かれていたということです。このことと旅の特徴をミックスさせると、幕府領、藩領などの領域に分かれているため、徒歩で移動する旅行者は往復で様々な性質の違う領域を通過することになります。現在の旅行ですと、新幹線でも飛行機でも車でも、出発地と目的地が直接乗り物で結ばれますが、江戸時代はそうではないのです。旅行者は目的地への途上で風土や制度の異なる領域を通過することになるので、人々が他領の領民や風土にどういう認識を抱いたのかというのは、旅行者の記録からたどれる大変面白い検証テーマになります。学術的にも、江戸時代の藩研究などでは、重要な研究課題になると思っています。

もっとも、こうした研究については、歴史学では東北を事例に少し行われています。旅日記などを使って、他者が東北をどう認識していたのか、東北の言語をどう認識していたのかといったこと、要は東北が他者からどうみられていたのかを探る研究です。[3] 旅行者の記録は地域認識を探究する格好の素材だということが分かってきたわけですが、今回は水戸藩という藩領域を対象に検証することにします。すなわち、常陸国のうち水戸藩の領地と領民に対する他領民の認識を旅日記、特に知識人が書き残した紀行文から明らかにすることを今回の発表テーマにしたいと思います。水戸藩が他者からどのようにみられていたのか、この点に迫っていきます。常陸国といえば水戸藩以外も含まれますが、私の知識的な限界上、水戸藩を限定にしてお話します。地元の皆様から、たくさん御意見をいただければ幸いです。

一　豊饒な領地

最初に、収集した旅日記について簡単に触れたいと思います。

今回、「知識人の紀行文」を紹介しますとお伝えしましたが、それなぜかというと、知識人の書いた紀行文は内容が詳細で、水戸藩に関する具体的な記述がたくさんみられるからです。ご紹介する【表】は、棚倉街道を通過した知識人の紀行文を一覧にしたものです。私の関心が水戸徳川家の墓所である瑞龍山や光圀の隠居所の西山荘への来訪状況にありましたので、双方に近い棚倉街道を通過した知識人の紀行文を集めたということです。収集に若干偏りがあり、完全なものではありませんが、旅行者の行程、年代等を示し、領地、領民という項目では、その記録に領地に関する記述があればマル、なければバツ、領民に関する記述があればマル、なければバツというように表記しています。

収集した紀行文は全部で一四点ですが、まず看取できるのは、最初の元禄一〇年（一六九七）の安藤朴翁『ひたち帯』から安永七年（一七七八）の伊能忠敬の『奥州紀行』に至るまでで、ほかの領地の知識人による水戸藩領地や領民に対する記載がほとんどみられないということです。実は、他領知識人の水戸藩領に対する関心は、江戸時代の前半頃はあまりなかったのではないかと考えてもいますが、サンプルが少ないので、即断はやめておきます。

いずれにせよ、水戸藩の領地や領民に対する他領知識人の記述が明確にみられるのは、天明八年（一七八八）の古川古松軒『東遊雑記』以降になります。『東遊雑記』は、備中国出身で幕府の巡見使に随行した古松軒の旅の記録です。今回の発表では、これに加えて福山藩の儒学者菅茶山、二本松藩士の成田鶴斎、伊勢松坂の商人で蔵書家でもあった小津久足の記録を紹介してみようと思います。

ここからは、具体的に史料を読んでいきます。本文のカッコ内は訪れた水戸藩領内の地名で、傍線、波線は私が引いており、傍線は領地に関する記述、波線は領民に関する記述です。「№」の数字は表の番号になります。

【史料1】古川古松軒『東遊雑記』（天明八年〈一七八八〉、№6）

（太田）扨常州に入りて上国の風にみえ、人家のもやうもよく、百姓の妻子に至るまでも賤しからず。作業も出精せると見えて作物も見事にて、士をみて、礼をせざるはなし。小児に至るまで平伏して、無礼の体更になし。…常州に於ひては貴賤共不礼の体、更に見えず。予按るに、光圀公世に知る賢君にて国をおさめ給ひし事、普く世人の云事にて、此君の御遺風にて、かくまでもきは立、奥羽に勝れて見ゆる事也と、人々評判せし程の事也。当君も東都に於ひて賢君也と称誉せる事也…太田発足、五里枝川休、二里半長岡止宿…此辺の百姓家いよゝよし。此せつ稲を苅入るゝ時節にて、農業の体を見

全体の行程	領地	領民
亀山→京都→草津→関→伊勢神宮→津→熱田→新居→小田原→江戸→行徳→香取→鹿島→水戸→額田→太田→額田→水戸→宇都宮→日光→水戸→太田→大中→徳田→磯原→水戸	×	×
江戸→宇都宮→白河→会津若松→郡山→福島→米沢→山形→新庄→羽黒山→鶴岡→酒田→象潟→本荘→久保田→弘前→三厩→松前・蝦夷地→青森→盛岡→気仙沼→金華山→千厩→平泉→石巻→古川→松島→塩釜→仙台→角田→中村→磐城平→棚倉→水戸→江戸	×	×
和田→木更津→江戸→日光→那須→白河→福島→仙台→塩釜→松島→石巻→渡波→金華山→鮎川→小渕→渡波→登米→平泉→仙台→福島→磐城平→太田→水戸→筑波山→江戸→浦賀→和田	○	×
京都→守山→名古屋→秋葉山→鎌倉→江戸→銚子→水戸→棚倉→須賀川→二本松→仙台→松島→塩釜→宮城野→福島→白河→日光→桐生→善光寺→諏訪→飯田→大久手→守山→石山	×	×
佐原→那珂湊→磐城平→中村→仙台→塩釜→松島→塩釜→仙台→福島→郡山→棚倉→太田→水戸→佐原	×	×
江戸→白河→会津若松→福島→米沢→小国→山形→尾花沢→鶴岡→羽黒山→鼠ヶ関→酒田→鳥海山→象潟→弘前→三厩→松前→三厩→青森→花輪→盛岡→水沢→気仙沼→平泉→石巻→吉岡→松島→仙台→相馬→磐城平→棚倉→太田→水戸→江戸	○	○
江戸→木更津→銚子→水戸→太田→金砂山→棚倉→福島→米沢→山形→山寺→湯殿山→月山→羽黒山→鶴岡→酒田→鳥海山→象潟→弘前→青森→三厩→青森→久慈→盛岡→平泉→仙台→塩釜→仙台→福島→日光→高崎→軽井沢→諏訪→関ヶ原→大津→京都	×	○
江戸→行徳→佐原→鹿島→大貫→水戸→額田→太田→額田→水戸→土浦→松戸→江戸	○	○
二本松→矢吹→棚倉→太田→水戸→助川→磯原→平→三春→二本松	○	○
栗橋→日光→棚倉→平潟→須賀川→白石→仙台→塩釜→松島→平泉→沼宮内→七戸→下風呂→箱館→大畑→七戸→三戸→大湯→秋田→象潟→酒田→鶴岡→湯殿山→大沼山→米沢→会津若松→新潟→長岡→高田→善光寺→上田→秋葉山→浜松→御厨	×	×
小見川→鹿島→水戸→太田→磯原→磐城平→中村→仙台→塩釜→松島→仙台→福島→白河→日光→筑波山→小見川	×	×
江戸→銚子→鹿島→筑波山→水戸→太田→磯原→磐城平→仙台→塩釜→松島→仙台→福島→白河→日光→江戸	○	○
佐倉→大洗→水戸→太田→棚倉→須賀川→福島→仙台→塩釜→松島→石巻→金華山→石巻→松島→塩釜→仙台→岩沼→中村→磐城平→水戸→佐倉	○	×
江見津→久留米→広島→大坂→京都→伊賀上野→伊勢神宮→桑名→江戸→成田→水戸→棚倉→磐城平→中村→仙台→塩釜→松島→金華山→石巻→岩ヶ崎→小安→秋田→酒田→村上→新潟→新発田→会津若松→白河→日光→江戸→高崎→松本→中津川→名古屋→津→京都→大坂→下津井→丸亀→金毘羅宮→松山→八幡浜→臼杵→府内→熊本→久留米→長崎→島原→江見津	×	×

に、国の風俗にて婦人かひゞゝしく、小児に至るまでも、業を大切に勤る体なり。宿々に於ひても、御巡見使の事なるゆゑに、念の入料理なども賤しからぬ取組なり。兎角、味噌・醤油の味ひあしきには、人々困りし体なりと云ふ。光圀公の御時代より、民の奢を大に制し給ひ、分外の暮しをする百姓あればきびしく罰し給ひ、驕らずして家業に出精せる百姓は、案外に賞し給ひし事にして、友吟味にして、互ひに奢の道をかたく慎みし故、いつとなく国の風俗となりて、今にても味噌・醤油の味ひよきを食せる百姓は奢り者と云ひふらし、是等の事をもつて万事をおもふべし。

【史料2】菅茶山『ひたちのミちの記』（文化元年〈一八〇四〉、No.8）

（太田）額田の南より此あたり、すべて沃土と見へ、民物も多く、岡陵の上までもミな田圃也。水戸の近傍ハ秧を挿こと至て密也。このあたりハ踈濶なり。また紅花を多くうへて、此ころ采り製す。

（小幡）樅山より小幡迄ハ、水戸の封内にて、民撲にして礼あり。馬卒の騎れるもの、人に逢ふて下り、農夫の耕もの道を問へバ、笠をぬぎてこたふ。宗藩の民よろづなめけなるべしと、おもひしに、さあらぬハ賢君の余沢なるべし。この間旅行の人多からず見ゆれど駅店ハあしからず…水戸の前後、大田の山中迄米甚よし、しらげもくハし。道すぢすべて田う

【表】 棚倉街道通行旅行者（紀行文）の行程

	和暦	西暦	史料名	出典	旅行者名
1	元禄10	1697	ひたち帯	『ひたち帯―元禄常陸紀行―』	安藤朴翁
2	宝暦12	1762	奥羽紀行	函館市中央図書館蔵	宮川直之
3	明和8	1771	奥遊日記	『土佐群書集成14』	池川春水
4	明和8	1771	秋風記	田中紫紅『秋風記』	諸九尼
5	安永7	1778	奥州紀行	『伊能忠敬書状　千葉県史料近世篇文化史料1』	伊能忠敬
6	天明8	1788	東遊雑記	『日本庶民生活史料集成3』	古川古松軒
7	寛政2	1790	北行日記	『高山彦九郎全集3』	高山彦九郎
8	文化元	1804	ひたちのミちの記	菅波哲郎「資料紹介　菅茶山著「ひたちのミちの記」（草稿本）」（『広島県立歴史博物館研究紀要6』）	菅茶山
9	文政6	1823	南轎紀游	『南轎紀游』	成田鶴斎
10	文政10	1827	みちのく日記	『御殿場市史4近世史料編』	三井園蚊牛
11	天保7	1836	諸君子句集・陸奥つれゞゝ草	『大原幽学全集』	大原幽学
12	天保11	1840	陸奥日記	『東北文化資料叢書11　小津久足　陸奥日記』	小津久足
13	天保14	1843	みちのくの日記	無窮会専門図書館神習文庫蔵（『玉篇11』）	伊能穎則
14	安政元	1854	諸国廻歴日録	『随筆百花苑13』	牟田高惇

へ、麦うつさかり也。このあたりまた、こかひすると見へて、繭のほしたるを、処々にてミる。

【史料3】成田鶴斎『南轎紀游』（文政六年〈一八二三〉、No.9）

（太田）太田ノ治下ニ至ル、四方トモニ甚広平ニシテ田圃開ケ目ノ及フ処畳ヲ布ルカ如シ、尤地モ肥饒ト見ユ

（大久保）当時詩家天民ノ出ル処ト云、又岩城界磯原村ヨリモ岩城安藤侯儒官朝日某出ル、義公文化ノ遺、民間ニモ好学ノ者多シト見ユ、此日途上麦穂抽紫蕨肥大ノモノ生セシヲ見ル

【史料4】小津久足『陸奥日記』（天保十一年〈一八四〇〉、No.12）

（太田）まことに、きのふけふ見めぐりし所々のさまの、よにもことなるさま、かばかりたゞしき風の今にのこれること、まつたくこれ義公の御余沢の千とせをかけてうせざるしるし、とすゞろに感をもよほしつ。

（常陸・陸奥国境）水戸よりこゝまでは、おほかた水戸家の御領なるが、他の国にはいまだみきかざることどもおほく、百姓どものすべてたゞしく、すなほにみゆるも、これ、はた義公の御余沢ならん、と感にたへたり。

これらの史料は内容的に面白いところが多々ありますが、発表の主旨に即して水戸藩の領地に関して共通することをピックアップしてみましょう。まず、【史料1】の古川古松軒は常陸の水戸藩領を「上国」の風土とし、領民の出精により作物は見事だと高評価しています。とりわけ棚倉街道の額田から太田にかけては広大な田園が広がっていたようで、【史料2】の菅茶山は「沃土」、【史料3】の成田鶴斎は「肥饒」と表現している通り、この辺りは非常に実り豊かな土地であったようです。つまり、一八世紀後半以降の他領知識人は、こぞって米が豊かに取れる領地だと水戸藩を認識しているのです。「米どころ水戸」、もしくは「米どころ常陸」という認識になるかと思います。もちろんここで挙げた知識人たちは、どこの領地でも絶賛しているわけではなく、古松軒などは疲弊した地域のことも包み隠さず書いていますので、水戸藩で米が取れるという評価は他の領地と比較して導き出されていることになります。

こうした他領知識人の評価にどのような意味があるのでしょうか。それは、これまでの水戸藩に関する研究を確認してみれば、鮮明になってきます。両者の評価は対極的といってもよく、従来の歴史研究は、他領知識人とは異なる見方でこの時代の水戸藩領を評価してきたのです。たとえば、乾氏の論文を紐解いてみると、関東農村では、天明飢饉以降天保飢饉をピークに荒廃現象が著しくなっており、この時期の、つまり一七八〇年代から一八三〇年代頃の水戸藩領でも人口減少や重課税による農民の疲弊、さらには地主の土地の集積などによって農村の荒廃が進んでいたとされ

ています。その上で、水戸藩の天保改革の主要課題は、この農村荒廃に歯止めをかけることにあったという指摘がなされているのです。[4] もっとも、ここでいう農村荒廃というのは、見た目上で米が取れるかどうかということではなく、領民を取り巻く社会経済状況の変化によってもたらされた現象で、必ずしも外見上の農作物の収穫状況を反映した言葉ではないかもしれません。ただ、水戸藩で農村荒廃が進んでいたとされる天明から天保という時代は、今回紹介した史料の1から4の旅日記が書かれた時代と全く一致しています。その時代の水戸藩領を実見した他領民が下した、米が豊富に取れるという評価は重要だと思います。

どちらが正しいかを判断することはできませんし、ここでの目的は判断することではありません。強調しておきたいのは、米が豊富に取れる土地であるという旅行者の情報を念頭に、今後領内を改めて分析することで、それまでの荒廃とはまた別の社会状況を捉えることが可能になるのではないかということです。他領知識人の水戸藩認識は、この時代の新たな社会評価を見出す座標軸になる可能性を秘めているのではないでしょうか。私は旅行史の研究をしていますが、他者から自己がどうみられているかという課題に迫る上で、旅日記に高い史料的価値があるということも、ここでアピールしておきたいです。

二　模範的な領民

次に、領民の性質についても同様に検討してみたいと思います。これは、結論からいえば領地と同じような評価になるのですが、たとえば水戸藩を「上国」と捉えた古川古松軒は、水戸藩領の家居のよさも指摘し、「貴賤共不礼の体、更に見えず」などと領民の礼儀正しさに感服していました（【史料1】）。領民がみな質朴だったことも特徴的だったようで、菅茶山は「民撲（樸）にして礼あり」、つまりは質素で礼儀正しいと評していますし（【史料2】）、小津久足も「百姓どものすべてただしく、すなほにみゆる」、すなわち率直で素直だと領民の人となりに賛辞を送っています（【史料4】）。つまり、他領民からみた水戸藩の領民というのは、礼儀正しさと質朴さを兼ね備えた模範的な人々だったのです。領地だけでなく、領民もまた称賛されているということになります。今回のシンポジウムの参加者は茨城県の方が多く、水戸の方も多いと思いますが、私は決して皆さんに忖度してこういう発表をしているわけではありません。この時代の史料に、実際にそう書いてあるのです。

以上のことを確認した上で次に注目しておきたいのは、こうした礼儀正しく質朴な領民の性質が、徳川光圀（一六二八－一七〇〇）の遺沢、つまり恩恵だと考えられていることです。二代藩主光圀のおかげで領民にこうした性質が備わったのだというのです。

たとえば、古松軒は、光圀は世に知られた賢君であって、その御遺風によって領民の礼節が際立って、奥羽に勝っていると述べており、さらに光圀が領民の奢侈を制禁し、家業に出精する百姓に賞を与えたため、奢侈を慎むのが国の風俗となって、農業面でも女性がかいがいしく働き、子供までも農業に励むのだと認識しています（【史料1】）。水戸藩で農業生産がよいのは、光圀の遺風によるのだと捉えているのです。さらに、茶山も水戸藩の領民が礼儀正しいのは賢君（光圀）の「余沢」、つまりは恩恵だとしていますし（【史料2】）、久足もまた正しい風習や領民の有様は光圀の「余沢」という受け止め方をしています（【史料4】）。ここでいう風習とは、恐らく領民の質朴さとか礼儀正しさを指しているのだと考えられます。成田鶴斎は、光圀の文化的な遺沢によって水戸藩では民間でも好学の者が多いという述べ方もしています（【史料3】）。

こうした認識が出てくるのはなぜでしょうか。背景について、多くを語る力量はないのですが、一つ考えられるのは『西山遺事』だろうと思っています。ここで取り上げた四人は、いずれも光圀の言行録である『西山遺事』（『桃源遺事』）を参照し、光圀像を形成していたと考えられます。古松軒の『東遊雑記』に「此君の賢徳は普く世人のしる事にして、西山遺事と号せし書に粗其徳をあらはせし事なり」、久足の『陸奥日記』に「この瑞竜山の御ことは、『御行実』『桃源遺事』などにくはしくみえ」などとあるように、各人の紀行文中に『西山遺事』の名が出てきます。これは、光圀が没した翌年の元禄一四年（一七〇一）、彼に仕えた三木之幹ら三人が編纂したもので、和文体で事蹟・逸話を豊富に盛り込み、江戸時代に出版されることはありませんでしたが、写本として全国に流布し、後世の光圀像の形成に大きな影響を及ぼしたといわれています。[5] 具体的には、領民たちを大変手厚く扱ったり、親孝行で農業に出精した百姓を善行者として表彰したりといったエピソードのほか、礼節に厚く、質朴な光圀の人柄を偲ばせるエピソードが綴られています。[6] これらと今回の話を関連づけて整理すると、水戸藩領で米が豊かに取れるというのは為政者、治者としての光圀の遺沢ということになりますし、領民が礼儀正しく質朴だというのは、光圀のパーソナルな部分が遺沢として受けつがれたと捉えることができます。『西山遺事』に影響された他領知識人は、一八世紀後半以降の水戸藩領においても光圀の人格が領民に遺沢として根付いていると考えたのでしょう。

ただ、冷静に考えてみれば、一八世紀後半以降というのは、光圀が亡くなってから一〇〇年ほどたった年代ということになりますので、この点を頭に入れておく必要があると思います。私自身は、光圀の威光がどれほど絶大であったとしても、実際に領民個々人が光圀を意識して質素な振る舞いをしていたとは考えにくいと思っていますし、いかに秀でた人格の明君が存在したとしても、それが一〇〇年後の領民の精神に受け継がれているという言説を現実的に受け止めることは難しいと考えます。少なくとも立証することは困難でしょう。明君や聖人の遺沢が領民に根付くという

発想は、おそらく江戸時代の知識人の思想的な特徴ではないかと考えられ、光圀の威光の影響を濃厚に受けているのは、あるいは領民よりも知識人だったのではないかという気もしています。

三　他藩の例

水戸藩に関する話はここでひと区切りとしまして、次に他藩の例を少しだけご紹介しておきます。私は仙台在住で、仙台藩の研究もしていますが、こうした水戸藩領の旅日記の記述が、実は他藩と比較しても面白いということを少しお伝えしておこうと思います。

小津久足は『陸奥日記』の中で、水戸藩の後に訪れた仙台藩について、「ここはげに名だかき仙台の城下のただ中なれば、さすがににぎはしけれど、おもひしよりは、よろしからぬ町づくり也」とか、「その浜街道も相馬領をはなれて仙台領にいれば、人心さかしらだちたるも、仙台城下は、ことさらに心すなほにあらず」と記しています。水戸藩と比較すれば一目瞭然ですが、仙台城下はよくない町づくりだ、領民は利口ぶって心が素直ではないなどと述べており、仙台藩領の町の様子や領民に対して好感を抱いていないことが読み取れます。評価が藩によって大きく違っているのです。

また、これは素人的な考えですが、仙台藩で水戸藩の徳川光圀に匹敵する人物といえば伊達政宗でしょうが、たとえば旅日記を読んでいて、仙台藩の領民のこういうところが政宗の遺沢なのだというようなことが書かれた記述は、現状では目にしていません。

では、同じような例がないかというと、そういうわけではありません。水戸藩と類似した例が確認できるのが米沢藩です。幕末期に米沢藩を訪れた学者や武士が著した米沢藩の見聞録によれば、米沢藩領内の豊かさや人々の勤勉さといった藩の富強ぶりが、一八世紀後半の藩政改革を主導した上杉鷹山の美政によるものと評価されています[7]。光圀と鷹山では年代が異なりますが、両者は共に明君として知られており、領土・領民の評価とその背景に共通点がみられます。両者に加え、熊本藩の細川重賢、岡山藩主の池田光政、会津藩主の保科正之は、江戸時代後期には天下古今で特に優れた五人の明君の一人に数えられていました[8]ので、今後の検証によっては、知識人たちが明君信仰といえるような認識を持っていたことを旅日記から明らかにできる可能性があると考えています。いずれにしても、こうした例がどのくらい確認できるのか、これから調べていけたら面白いなと思っています。

おわりに

拙いお話となりましたが、最後にここまでの内容をまとめつつ、私が気になっている疑問などをみなさんに投げかけてみたいと思います。

今回は他の領民が水戸藩に対して抱いた印象を検証してきまし

た。水戸藩の領地や領民に対して、他領知識人は、米の実りが豊かな土地であって、それは領民の勤勉な農業への出精に起因する、そして領民は礼節に厚く、質朴であると認識していました。この時代の水戸藩領で米が豊富に取れるという情報は、同じ年代に領内の社会的、経済的な農村荒廃が顕著になるといった見解に対して、それとは異なる領内の評価が見出せる可能性を示しているのではないでしょうか。

また、他領知識人は、こうした領地の状況や領民の性質が徳川光圀の遺沢によるものだと認識していました。光圀の名声が水戸藩を超えて広がっていたことは間違いありません。「水戸藩といえば光圀」というイメージが、少なくとも知識人の間で江戸時代の後半には意識化されていたと考えられます。これについては、『西山遺事』の影響が大きいと述べましたが、それ以外にも、旅先での情報交換もまた、光圀の名声を広める役割を果たしていたと思っています。たとえば、野口氏によれば、いわゆる黄門伝説が一九世紀以降に旅行者によって各地に伝播されていたそうです。[9] 江戸時代に旅行者が全国的に増加するのが一八世紀後半以降ですので、人々の交流が活発化する中で、光圀のさまざまな逸話が各地に広まっていったのだと思います。

ただ、一方で断っておかなければならないのは、農作物の収穫状況は実際の田畑の状況をみれば明らかですから、これはともかくとして、領民の礼儀正しさや質朴さについては、光圀への過度な信奉が領民を美化して捉えることにつながっている可能性を排除できないということです。鈴木氏によれば、光圀の事蹟・逸話に触れた書物が江戸時代後期には多数みられるようになり、それにともなって光圀の人間像は誇張・美化されていったといいます。[10] また、知識人にとっての明君イコール領民にとっての明君とは限らないということにも注意を払わなければいけないと思います。

そこで気になるのは、水戸藩領民の自己認識はどうだったのだろうかということです。領民たちは、光圀の威光をどのように認識していたのでしょうか。光圀の精神を自分たちが受け継いでいるという意識はあったのでしょうか。みなさまから御意見をいただければありがたいです。

またもう一点、今回の分析を踏まえて申し上げます。旅日記を読んでいると、今回のような「どこそこ領は何々だ」という記述が時折出てきますが、それは一八世紀後半頃から特に増えていくように感じています。水戸藩に関する記述にもその傾向がみられますし、東北地方を旅した人の旅日記を網羅的にみていると、およそそうした傾向が見出せそうです。この点に関しては、当該期に領主から領民までの幅広い層が「お国ぶり」、つまりは地域性を自覚して、それに関心を寄せていたという見解[11]があって、それとも相応してきます。自分たちが暮らす地域の成り立ちや風土への関心が高まって、さらにそれが他地域への関心を生んでいったということでしょうが、ではなぜ一八世紀後半頃からなのでしょうか。気になっているところです。

なお、旅行史研究の観点からいいますと、幅広く一般庶民までが各地の地域性に関心を寄せていたかどうかは改めて検討すべき課題だと思っています。というのも、今回は詳しくお話できませんでしたが、伊勢参りをした一般庶民の旅日記をみてみますと、水戸藩領を通行した伊勢参りの旅日記には、残念ながら水戸藩の領地のことも領民のことも、そして光圀のことも、ほぼ記されないという特徴があります。したがって、知識人のみならず一般庶民までが地域に関する高い関心を持っていたかどうかは、詳しく検討した方がよいと考えています。

以上、水戸藩についてあまり詳しくない私が、それこそいってみれば他領民が水戸について語るような内容になりました。おそらく不勉強による誤解や誤りもあるでしょうし、また、私が知らないことをご存じの方もおられるでしょうから、この機会に教えていただければ幸いに思います。また、今回は現地でお話しすることができませんでしたが、いずれ皆様と交流する機会があることを楽しみにしています。それでは、私の発表はこれで終わりにいたします。御清聴ありがとうございました。

［註］

（1）堀辺武「東北地方からの伊勢参宮と常陸国―道中日記からルートを探る―」（『茨城の民俗』四四、二〇〇五年）。

（2）高橋陽一「旅の行程とその特徴―道中日記・紀行文の統計的分析―」（『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』清文堂出版、二〇一六年）。

（3）河西英通『東北―つくられた異境』（中央公論新社、二〇〇一年）四－一七頁、菊池勇夫「近世奥羽の御国言葉―文化的位相をめぐって」（『東北から考える近世史―環境・災害・食料、そして東北史像』清文堂出版、二〇一二年）。

（4）乾宏巳「水戸藩の天保改革」（『水戸藩天保改革と豪農』清文堂出版、二〇〇六年）。

（5）鈴木暎一『水戸光圀』（吉川弘文館、二〇〇六年）六－七頁。

（6）『西山遺事』（徳川侯爵家蔵版、一九三五年、国立国会図書館デジタルコレクション）。

（7）小関悠一郎『上杉鷹山「富国安民」の政治』（岩波書店、二〇二一年）三－五頁。

（8）小関前掲注（7）『上杉鷹山』一〇九頁。

（9）野口武彦『徳川光圀』（朝日新聞社、一九七六年）一二頁。

（10）鈴木暎一『水戸光圀』（吉川弘文館、二〇〇六年）六－七頁。

（11）若尾政希「地域意識を問い直す―プロローグ―」（若尾政希・菊池勇夫編『〈江戸〉の人と身分 五 覚醒する地域意識』吉川弘文館、二〇一〇年）。

［主な参考文献］

板坂耀子『江戸の紀行文　泰平の世の旅人たち』（中央公論新社、二〇一一年）
乾宏巳「水戸藩の天保改革」（『水戸藩天保改革と豪農』清文堂出版、二〇〇六年）
河西英通『東北―つくられた異境』（中央公論新社、二〇〇一年）
小関悠一郎『上杉鷹山　「富国安民」の政治』（岩波書店、二〇二一年）
小関悠一郎「明君象の形成と民衆の政治意識―阿波国小松島浦船頭専助と細川重賢明君象―」（『〈明君〉の近世―学問・知識と藩政改革―』吉川弘文館、二〇一二年）
菊池勇夫「近世奥羽の御国言葉―文化的位相をめぐって」（『東北から考える近世史―環境・災害・食料、そして東北史像』清文堂出版、二〇一二年）
鈴木暎一『水戸光圀』（吉川弘文館、二〇〇六年）
高橋陽一「他領民の藩認識―水戸藩領への旅行者を事例に―」（『宮城学院女子大学研究論文集』一三二、二〇二一年）
高橋陽一「旅の行程とその特徴―道中日記・紀行文の統計的分析―」（『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』清文堂出版、二〇一六年）
野口武彦『徳川光圀』（朝日新聞社、一九七六年）
ヘルベルト・プルチョウ『江戸の旅日記―「徳川啓蒙期」の博物学者たち―』（集英社、二〇〇五年）
堀辺武「東北地方からの伊勢参宮と常陸国―道中日記からルートを探る―」（『茨城の民俗』四四、二〇〇五年）。
若尾政希「地域意識を問い直す―プロローグ―」（若尾政希・菊池勇夫編『〈江戸〉の人と身分 五　覚醒する地域意識』吉川弘文館、二〇一〇年）
陸奥日記研究会編『小津久足 陸奥日記』（東北大学大学院文学研究科東北文化研究室、二〇一八年）
『西山遺事』（徳川侯爵家蔵版、一九三五年、国立国会図書館デジタルコレクション）

［追記］本発表は高橋「他領民の藩認識―水戸藩領への旅行者を事例に―」（『宮城学院女子大学研究論文集』一三二、二〇二一年）に新たな事例を加え、再構成したものです。本論は、宮城学院女子大学機関リポジトリから閲覧・ダウンロードできます。

あとがき

今回の企画に着手したのは二〇二〇年一月でした。直後に新型コロナウイルスの感染が拡大し、翌年度の開催は見送らざるを得ませんでした。結果、報告者のみなさまには、準備に二年以上もご協力いただくことになりました。その間も快くお付き合いいただき、心より感謝申し上げます。

シンポジウム当日の参加者は一七〇名でした（事前エントリーは二一二名）。オンラインゆえに、インターネットの利用環境が整っていない方々（とくに近隣にお住いの高齢者か）の参加が難しくなったと推測され、そのことについては忸怩たる思いでいます。とはいえ一方で、北は北海道、南は台湾など、遠方からの参加者が増え、オンラインの良い面も現れた回になったようにも感じています。

慣れないオンラインでのシンポジウムを乗り切ることができたのは、日本近世史ゼミのみなさん（周子琪・尾崎紗耶香・植月清香・橋詰いち歩）と本学助手・豊川淳さんのご尽力の賜物です。この場を借りて、あらためて御礼申し上げます。

（添田 仁）

本書は、科学研究費補助金（基盤研究（B）課題番号 19H01293）「研究者ネットワークによる巨大災害被災地での歴史文化環境再生の研究」（分担・添田仁、代表・佐藤大介）の成果の一部である。

第一六回茨城大学人文社会科学部 地域史シンポジウム記録集
旅人たちが観た水戸藩 ― 旅日記・名所絵を読む ―

二〇二三年一月三一日 発行

編者　添田　仁

発行　茨城大学人文社会科学部
〒310-8512 茨城県水戸市文京二-一-一
電話 〇二九-二二八-八一一一(代)

印刷　山三印刷株式会社

表紙写真　常陸名所図屏風　旌桜寺付近を抜粋
（個人蔵、岩手県奥州市牛の博物館寄託）

Ibaraki University